

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

## 平成30(2018)年度 実施報告書

2019年3月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

## 平成 30（2018）年度 実施報告書

2019 年 3 月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター



## はじめに

本報告書は「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成－女性の役割を見据えた知の国際連携－」事業とその他の資金による平成 30（2018）年度のグローバル協力センターの活動実績を取りまとめたものです。

グローバル協力センターは、国際的な課題に関する教育研究とこれらを通じた女性リーダーの育成、開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援を 2 つの柱として、開発途上国や国際協力の現場から学ぶ授業、大学院生の国際調査支援、他大学と連携したワークショップ、シンポジウム・公開講演会、幼児教育分野の人材育成のための研修等に取り組んでいます。また、「共に生きる」スタディグループを通じた、学生による自主活動を展開してきています。

本学は、2002 年からアフガニスタン女子教育支援に取り組んできておりますが、今年度は、有識者による公開講演会・セミナー、女性教員等短期研修、絵本・図書館活動支援を実施し、継続的なアフガニスタン女子教育支援に取り組んで参りました。

また、2017 年度から、国際社会において議論が進んでいる「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ・持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals, SDGs)」を取り上げ、学内連続公開講座を開催しています。今年度は、市民社会と SDGs、母子保健をテーマに有識者を招聘しセミナーを開催しました。

本事業の実施にご支援、ご協力を賜りました学内外の関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。今後もこれまでの活動で得た平和構築と途上国の社会経済開発のためのネットワークと人材育成にかかわる知見や成果を活用して更なる知の集積・発信と教育研究に取り組んでいきたいと存じます。引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

2019 年 3 月

国立大学法人お茶の水女子大学  
グローバル協力センター長 浜野 隆





グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

平成 30（2018）年度 実施報告目次

はじめに

I. 事業の概要 .....	1
II. 平成 30（2018）年度の活動の概要 .....	5
1. 活動の概要 .....	7
2. 各活動の概要 .....	7
III. 国際的な課題に関する教育・研究、これらを通じた同課題に取り組む女性リーダー の育成 .....	11
1. 「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」 .....	13
2. センター教員担当の全学共通科目・セミナー .....	23
2. 1 全学共通科目「NPO 入門」 .....	23
2. 2 リベラルアーツ（LA）科目生活世界の安全保障 23「NPO インターンシップ 〔実習〕」 .....	24
2. 3 全学共通科目「平和と共生実習」 .....	25
2. 4 持続可能な開発目標（SDGs）セミナー .....	26
3. 国際調査支援 .....	30
4. 公開講演会・ラウンドテーブル .....	35
4. 1 UNOPS アフガニスタン事務所長とのラウンドテーブル .....	35
4. 2 公開講演会「アフガニスタン自立への展望：平和と安定に向けた日本の支援 の役割」 .....	37
5. 大学間連携イベント .....	39
5. 1 『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方 .....	39
5. 2 「ワークショップ：被災者の尊厳の視点から考える紛争・災害時の人道・緊急支 援～スフィア・スタンダード、教育ミニマムスタンダードに学ぶ～」 .....	41
6. 「共に生きる」スタディグループの活動 .....	43
6. 1 学生自主活動 .....	43
6. 2 「国際共生社会論実習」微音祭（大学祭）における展示・発表 .....	47

IV.	開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援事業（教育・研究成果の国際社会への還元） .....	51
1.	アフガニスタン女性教員・研究者の短期研修（野々山基金） .....	53
2.	アフガニスタン国未来への架け橋・中核人材プロジェクト（国際協力機構（JICA）PEACE プロジェクト） .....	55
3.	アフガニスタンへの絵本寄贈（野々山基金） .....	55
4.	乳幼児ケアと就学前教育研修（国際協力機構（JICA）課題別研修） .....	56
V.	その他 .....	61
1.	グローバル協力センター図書室利用状況 .....	63
2.	情報発信 .....	64

# I．事業の概要





## I. 事業の概要

### 1. 事業名

「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の国際連携—」

### 2. 事業期間

平成 22 (2010) 年度から平成 30 (2018) 年度

平成 22 (2010) 年度に文部科学省特別経費事業として 4 年計画で開始し、平成 23 (2011) 年度から大学一般経費事業に組み替え継続。

### 3. 概要

グローバル社会における平和構築を目指して、先進国および開発途上国の大学等との国際的ネットワークを創成する。このネットワークは、女性の役割を見据えた知的国際連携であり、先進国と途上国の大学等が共同して、途上国、特にアフガニスタンをはじめとするポスト・コンフリクト地域における女性と子どもへの支援の調査・研究と支援活動を行うとともに、ネットワークに基づく教育（人材育成）の実践の場とする。

### 4. 実施主体

国際本部グローバル協力センター

### 5. 目的・目標

本事業は、現代のグローバル社会における最重要課題である開発途上国、特にアフガニスタンをはじめとするポスト・コンフリクト国・地域における女性と子どもへの支援を目指した、知的国際連携による教育・研究・社会貢献を目的とするものである。ポスト・コンフリクト国・地域を含む開発途上国では、女性は経済的・社会的弱者であり、中等・高等教育を受けることが非常に難しいのが現状である。

お茶の水女子大学は、大学の基本的な目標として「すべての女性とその年齢・国籍等にかかわらず、個々人の尊厳と権利を保障され、自由に自己の資質能力を開発し、知的欲求の促すままに自己自身の学びを深化させること」を掲げている（第 2 期中期目標・計画前文）。さらに、世界の女子大学の多くもまた、「自らの知見を世界の平和の為に使う」ことを建学の精神としている。本事業では、こうした世界の女子大学が持つ建学の理念を実現するために、女子大学が一つになって平和を築くための活動を行うことを目的とする。

本事業の取り組みは、お茶の水女子大学が拠点となり、日本および世界の女子大学とネットワーク（フォーラム）を形成し、大学の構成員（教職員、学生・大学院生、卒業生の組織）による大きなネットワークによって開発途上国の女性と子どもへの支援、紛争によって傷

ついた女性と子どもへのサポートを行うものである。また、こうした活動は、大学の使命である教育・研究・社会貢献を活性化し、この分野の人材育成活動に資することが考えられている。

本事業を通じて、大学間国際連携に基づくグローバル社会における平和構築の知的ネットワークの形成と、これに基づく教育・研究活動システムの創成を目指す。

## II. 平成 30（2018）年度の活動





## II. 平成 30（2018）年度の活動

### 1. 活動の概要

グローバル協力センターは、国際的な課題に関する教育研究とこれらを通じた女性リーダーの育成、開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援を2つの柱としており、今年度は、1つ目の柱について、スタディツアー等の授業、国際調査支援、大学間連携イベント、シンポジウム・公開講演会を、2つ目の柱について、開発途上国向けの研修等を実施した。また、「共に生きる」スタディグループを通じて、学生による自主活動を展開した。

本学は、2002年からアフガニスタン女子教育支援に取り組んできているが、今年度は、有識者による公開講演会・セミナー、女性教員等短期研修（野々山基金）、絵本・図書館活動支援（野々山基金）を実施し、継続的なアフガニスタン女子教育支援に取り組んできた。

また、2017年度から、国際社会において議論が進んでいる「持続可能な開発のための2030アジェンダ・持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals, SDGs）」を取り上げ、学内連続公開講座を開催している。今年度は、市民社会とSDGs、母子保健をテーマに有識者を招聘しセミナーを開催した。大学間連携イベントでも、同アジェンダにおいて「今日の世界が直面する課題」として取り上げている頻発する災害と紛争について、人道・緊急支援に関するワークショップを開催した。

### 2. 各活動の概要

（1）国際的な課題に関する教育・研究、これらを通じた同課題に取り組む女性リーダーの育成

1）平成23（2011）年度から実施し、平成25（2013）年度に全学共通科目「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」として正規科目に位置づけた海外スタディツアーをカンボジアとネパールで実施した。農村や都市の開発と貧困の現場を訪問し、途上国の社会経済や国際協力についての理解、またフィールド調査手法に関する教育の充実を図った。

2）全学共通科目「NPO入門」、「NPOインターンシップ（実習）」の履修を通じて、学生にNPOに関する指導を行うとともに、国内のNPOにインターンとして派遣し、公益を目的とする団体における実務経験の獲得を可能にした。

全学共通科目「平和と共生演習」において、SDGsで取り上げる飢饉、貧困、教育、保健等について、プレゼンテーション、議論を通じて、こうした課題についての現場の状況を理解し、現場の視点で考える機会を提供した。

3) 国際調査支援では、「国連・持続可能な開発目標の 17 ゴール」をテーマとして募集を行い、医薬品及びパーソナルケア製品による水質汚染（スリランカ）、女性に対する暴力撤廃に取り組む NGO（タイ）、ビルマ・カチン系移民コミュニティの生成と変容（オーストラリア）に関する 3 件の調査についての支援を行った。

4) アフガニスタンで活動する国連プロジェクトサービス機関（UNOPS）アフガニスタン事務所長を迎え、ラウンドテーブル・ディスカッションを開催、アフガニスタンの最新の現状についての情報を得る機会とした。駐アフガニスタン日本大使を迎え、公開講演会「アフガニスタン自立への展望」を開催し、平和と安定に向けた日本の支援の役割についての議論を深める機会とした。

5) 大学間連携イベントとして、『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方』を開催し、本学及び他大学の学生に、途上国におけるフィールド調査に関する実践的な学びの機会を提供した。また、「被災者の尊厳の視点から考える紛争・災害時の人道・緊急支援」を開催し、国内の災害においても関心が高まっているスフィア・スタンダードについての理解を深める機会とした。

6) 「共に生きる」スタディグループを通じて、学生の自主活動を支援した。今年度は、中古教科書販売によるラオス・教育支援、シリア難民支援、フェアトレードによる南アジアの女性支援、「ビジネスから社会を変える～NPO 法人 CROSS FIELDS 講演会」、ネパールで医療協力の従事する医師をお招きしたセミナー、日中学生会議報告会、学園祭でのパネル展示・発表が行われた。

(2) 開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援事業（教育・研究成果の国際社会への還元）

1) アフガニスタン女子教育支援の一環として、野々山基金により、アフガニスタン女性教員・研究者 2 名の短期招へいを実施した。

2) 国際協力機構「アフガニスタン国未来への架け橋・中核人材プロジェクト」による研修員の受け入れを継続した。

3) 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会との連携により、アフガニスタンにおける絵本作成配布・図書館事業を支援した。

4) 乳幼児の保護と教育の観点から、国際的にニーズが高まっている幼児教育分野の人材

育成のため、アフリカ・中東の 7 か国の行政官、視学官、指導主事等を対象に「乳幼児ケアと就学前教育研修」（国際協力機構課題別研修）を実施した。





### Ⅲ. 国際的な課題に関する教育・研究、 これらを通じた同課題に取り組む 女性リーダーの育成



## 1. 「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」

### (1) 実施概要

#### 1) 目的

専攻・学年を問わず開発途上国の社会・経済・政治にかかわる問題や国際協力に関心を有する学生（学部・大学院博士前期課程）が、開発途上国における研究・実践の実績を有する教員の指導の下で事前学習と現地調査（8日間）を実施し、その成果をレポートにまとめて学内で発表することにより、現場での調査に根差した学習を行う。平成25年度より2単位の正規科目として実施している。学内公募・選考を通じて参加した学生数はカンボジア6名、ネパール4名の合計10名であった。

#### 2) 事前学習

説明会実施後、各グループ全8回（一部合同）の事前学習を通じ訪問国の社会経済や参加者の関心分野について学習した。

① 6月1日（金）履修説明会（合同）

② 6月4日（月）健康管理講座（合同）

講師：本田保健管理センター長

#### ●ネパール・グループ

③ 6月13（水）

授業の進め方、フィールドワークの技法、等

④ 6月27日（水）

文献講読・ディスカッション（1）ネパールの通史

⑤ 7月11日（水）

文献講読・ディスカッション（2）ネパールの民族・宗教・社会の多様性

⑥ 7月18日（水）

文献講読・ディスカッション（3）ネパールのジェンダー課題：寡婦を中心に

⑦ 7月25日（水）

文献講読・ディスカッション（4）ネパール再生可能エネルギーの社会経済的インパクト

⑧ 8月2日（木）安全講習会（安全、健康面での留意点について説明、等）

#### ●カンボジア・グループ

③ 6月14/15日（木/金）

カンボジアの現代史：ポルポト時代

④ 6月21/22日（木/金）

農村女性の生活



⑤ 6月28/29日（木/金）

基礎教育の課題

⑥ 7月5/6日（木/金）

調査の進め方

⑦ 7月13日（金）

ジェンダー課題と国際協力（講師：JICA 国際協力専門員 山口綾氏）

⑧ 8月31日（金）

調査の進め方・安全講習

本科目とは別に、6月16日（土）、大学間連携イベント「『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方」（講師：NPO 法人ムラのミライ海外事業チーフ・前川香子氏）が開催され、本科目受講生が参加した。

3) 現地実習

●ネパール（8月19日から8月26日まで8日間）

i) 参加学生 4名 引率者 2名（青木健太特任講師、原智佐特任准教授）

学年	文教育学部	理学部	生活科学部	大学院	計
1	1	2	0		3
2	0	0	0		0
3	0	0	0		0
4	0	0	0		0
博士前期課程	0	0	0	1	1

ii) プログラム概要

国連によって後発開発途上国（LDC: Least Developed Country）として認定されている域内最貧国の一つであるネパールを訪問し、同国が抱える社会、経済、ジェンダー等における諸課題に関する理解を深めることを目的として、各自が設定したテーマに基づくフィールド調査を行った。また、民族・言語・宗教・イデオロギーなどの面で多様性豊かなネパール社会において、現地の人々がどのように融和を保ちながら暮らしているのかを間近に見ることで、グローバル社会における共生のあり方について学んだ。

今回のツアーでは、ネパールにおける地域ごとの暮らしや格差について理解を深めるため、首都カトマンズのみならず、ネパールの政府機関である代替エネルギー促進センター（AEPC）の協力を得て、農村部での再生可能エネルギーを用いた生計向上プロジェクトの訪問、並びに、地域住民とのインタビューを実施した。現場見学に加えて、訪問前日の AEPC 本部における説明、および、翌日のジェンダー専門家によるレクチャーにより、政府による電化が進まない地域における再生可能エネルギーの普及によって、農村の女性や子どもの

生活（教育、健康、医療等）が改善し、また、ビジネスによる収入獲得等を通じて生計向上が図られることを重層的に理解した。また、AITM（Asian Institute of Technology and Management）学生との交流プログラムを実施し、参加学生は同年代のネパール人学生との交流を図った。

このほか、今回のスタディツアーでは、現地で働く国連職員、青年海外協力隊員との交流の時間を設けた他、日本大使館、JICA、ネパール政府機関、NGO、高等教育機関など様々なアクターを訪問し、実際に現地で働く方々それぞれからの視点について学ぶとともに、将来のキャリア開発に資する内容になるよう配慮した。

### iii) 調査日程

8月19日（日）	0:20 羽田発－4:50 バンコク着（TG661） 10:15 バンコク発－12:25 カトマンズ着（TG319） NGO クロス代表・檜戸健次郎医師によるブリーフィング
8月20日（月）	10:00 JICA ネパール事務所訪問 ① JICA の対ネパール支援概要説明 ② ボランティア事業説明 ③ 青年海外協力隊員との交流 ④ JICA 事業地見学（トリブバン大学教育病院、ハヌマンドカ王宮）
8月21日（火）	11:00 代替エネルギー促進センター（AEPC）事業概要説明 14:00 AITM (Asian Institute of Technology and Management) 学生との交流プログラム
8月22日（水）	終日 カブレパランチョーク郡・ラメチャップ郡における AEPC 事業地見学（ソーラー発電、小型水力発電、バイオガス等）
8月23日（木）	10:00 ジェンダー専門家 Dr. Indira Shakya レクチャー 14:15 在ネパール日本国大使館ブリーフィング 16:00 NGO サルタック事業概要説明 19:00 国連邦人職員との会食（UNDP、UNICEF、UNRCPD）
8月24日（金）	市内文化財見学（パタン・ダルバール広場、ボダナート寺院、等）
8月25日（土）	13:30 カトマンズ発－18:15 バンコク着（TG320） 22:45 バンコク発（TG682）
8月26日（日）	6:55 羽田着



↑ 大学生との交流後に撮影した集合写真（8月21日、於AITM）



↑ 村の小学校の先生へのインタビューの様子（8月22日、於カブレパランチョーク郡）

●カンボジア（9月15日から9月23日まで9日間）

i) 参加学生 6名 引率者 2名（原智佐特任准教授、駒田千晶アカデミックアシスタント）

学年	文教育学部	理学部	生活科学部	大学院	計
1	2	0	1		3
2	1	0	0		1
3	1	0	1		2
4	0	0	0		0
博士前期課程	0	0	0	0	0

ii) プログラム概要

1970年代から長期にわたる内戦とポルポト派による市民の虐殺を経て1990年代以降、平和構築と社会経済開発に取り組むカンボジアの歴史を理解した上で、農村部における聞き取り調査、プノンペンにおける大学生との交流等を通じて、教育の質、職業選択、労働移動等について具体的な情報を収集した。本調査では、農村に暮らす女性や大学生等への聞き取り調査を行うことで、実際の社会の課題や変化を理解することにつながった。

さらにこれらの情報の分析を通じて、人々が直面する課題や変化の背景や構造にも目を向け、以下の考察、理解の深化につながった。

教育の質、職業選択等と社会や経済の構造との関係  
 貧困や格差についての理解の深化

また、質問（英語）を考え、また、聞き取り調査等を通じて柔軟に質問内容を掘り下げていくことで、より広範な情報を得、理解を深める、ということも有意義な経験となった。

iii) 調査日程

9月15日	成田空港発→プノンペン着 (NH817)
16日	プノンペン→コンボンチャム 市内視察 農村調査に関する打ち合わせ
17日	農村における社会経済調査
18日	農村における社会経済調査 コンボンチャム→プノンペン
19日	カンボジア日本人材開発センター訪問、 クメール文化と歴史の講義、学生との交流、日本語教育説明
20日	難民を助ける会(AAR) Wheelchair for Development (WCD) インクルーシブ教育プロジェクト説明、車いす工房説明と見学、 車いす受益者宅訪問
21日	カンボジア日本人材開発センター カンボジアの学生のキャリア開発に関する調査 JICA カンボジア事務所事業説明
22日	ツールスレン虐殺博物館 国立博物館 プノンペン発→
23日	→成田空港着 (NH818)



4) 事後学習

事前学習を踏まえ、自ら設定したテーマについて、現地でのフィールド調査により得られた情報について、議論を通じて、問題の背景や構造への考察を加え、報告書を作成した。また、10月23日(火)、24日(水)、25日(木)に帰国報告会を開催し、調査の結果得られた学びを学内で共有すると共に、11月3日(土)から4日(日)まで開催された微音祭において学術企画の枠で一般向けに発表を行った。さらに、グローバル協力センターホームペ

ージに報告記事を掲載するとともに、スタディツアーの訪問記録および参加学生の報告書は『「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」スタディツアー実施報告書』として印刷・製本しホームページ上で公開した。

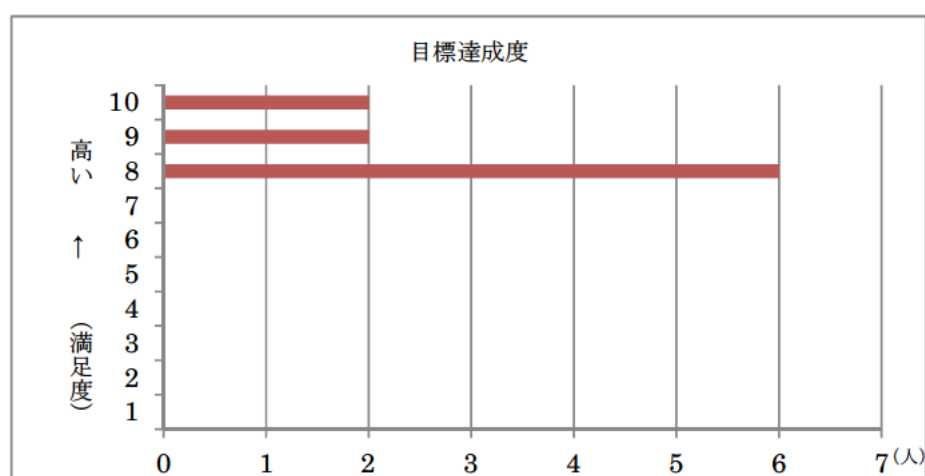
## （２） 参加学生アンケートに見る成果

スタディツアー実施前と終了後に参加学生に対して、参加の目的、参加満足度や参加経験を今後どのように活かしていくかに関するアンケートを行った。以下はその集計結果である。

### Ｑ１． 本スタディツアーに参加する目的

- ・国際教養の力を高めること。
- ・途上国の現状を知るため。
- ・語学力の上達。
- ・開発途上国であるネパールの文化や社会について理解を深めるため。
- ・カンボジアについて、メディアでしか知らないために、自分の五感で、カンボジアという国を知りたかったから。
- ・現地調査。
- ・国際協力についての知識、関心を深めるため。
- ・発展途上国の姿を自分の目で見る。
- ・国際開発について興味があるため、現地を実際に見ることで知識を深めるための一歩にしたいと思ったから。
- ・異文化理解、適応力や語学力の上達。

### Ｑ２． 本スタディツアーで目的をどの程度達成（満足）できたか



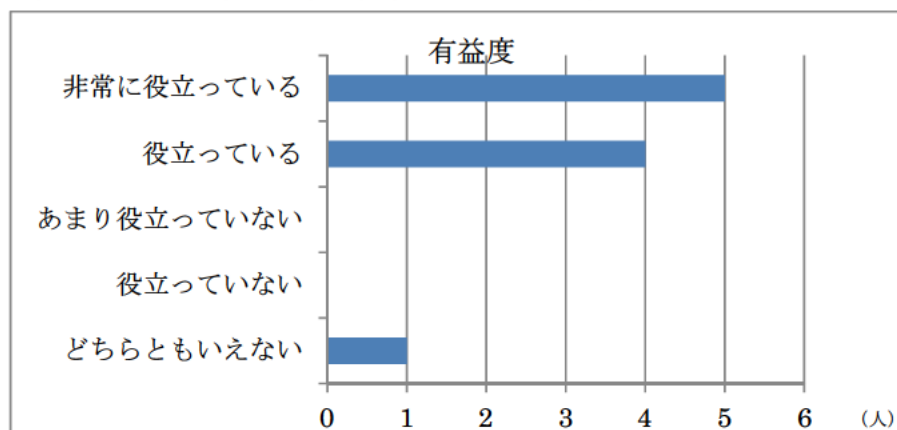
学生コメント（上記目的達成度の理由）

※目的達成度を下げた学生は、その理由として、自身の英語力、質問力のなさ、実習期間が短かったこと、を挙げている。

- ・とても濃い期間を過ごせたが、自分の英語力のなさを実感した。
- ・自分のやりたいことができたから。
- ・自分の調べていったテーマに対して、しっかり情報収集できたと思うから。
- ・私の調査テーマであった、ネパールにおける再生可能エネルギーの普及について、代替エネルギー促進センターの方にお話を聞いたり、実際に水力発電や太陽光発電を行っている農村を訪問したりすることで、ネパールの電力化の状況について詳しく知ることが出来たため。また、JICA や国連、日本大使館の方やジェンダー専門家など様々な方々に会ってお話を聞くことで、ネパールの文化や社会についてより深く学ぶとともに、自分の見識を深められたため。訪問先が英語の場合、思うように質問をすることが出来なかったため－3点とした。ただ、日本語の施設では自身の興味に寄り添った意見交換ができたためその点では十分に満足できるものだった。
- ・インタビュー内容は有意義なものであったが、一方的に質問せめするばかりになってしまったところもあったから。
- ・自分が求めていたことが少し理解できたが、言語の力がもっとあればさらに理解が深まったと思うから。
- ・期待していたよりも多くの経験ができ、学べたから。
- ・これまで文字や写真を通して学んできた、都市と農村の格差や様々なシステムの不足を実際にこの目で見て、途上国を本当の意味で知ることができた。また、カンボジア人の国民性にも関係しているとは思いますが、挑戦しよう、ルールを守ろう、より良い方法を考えようとする熱意や正義感があまり見られなかったのは、衝撃的であった。
- ・今回 9 日間という短い期間ではありましたが、自分の主に知りたいテーマであった「外国語教育とその後の職業選択」について様々な人（農村に住む高校生の子や退学してしまった子、都市の大学に通う子など）や角度からインタビューでき、ある程度農村と都市で違いがあり、比較ができたので、良い調査ができたと感じています。一方で九日間という短い期間だったので、もう少し時間とインタビュー対象者が多ければ、より数的に明確な調査ができたのではないかと思います。
- ・カンボジアの教育や、その根本にある文化や歴史について多くのことを知り、開発や教育支援について考えるきっかけになったから。



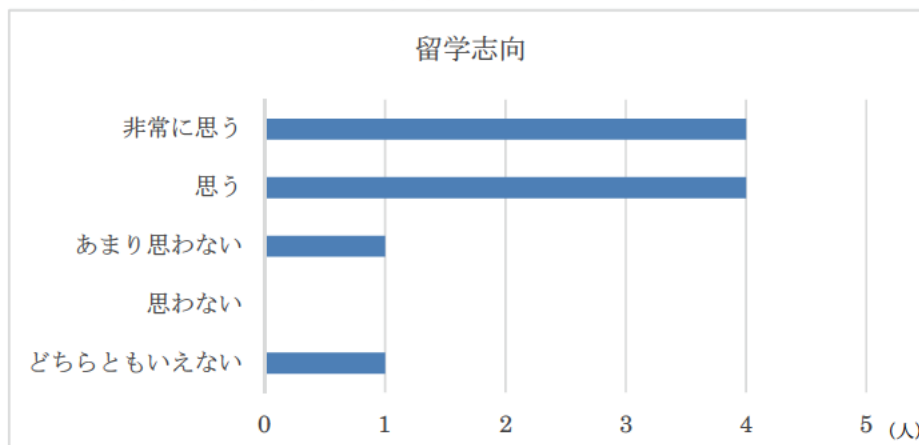
Q 3. 本スタディツアーによる経験が、学業、就職活動等に役立っているか



学生コメント（上記の理由）

- ・学習面でも、専門学習の面でも、向上心を持つことができたため。
- ・まだ、具体的な試験や就職活動をおこなっているわけではないため。
- ・自分のテーマ設定もあり、人生観を問うようなツアーであったので、非常に役立っていると思う。
- ・自分のやりたいことが今回の留学を経て、より明確になったため。
- ・移民や地域開発の必要性を生で感じたから。
- ・言語、国際、文化などを学ぶ強いモチベーションとなっている。
- ・今回の研修の内容は普段はどちらかというと専門外だったが、新しく知識と興味を持てたから。また、自分の将来について考えるきっかけにもなった。
- ・留学に行く前は、企業に就職しようと思っていました。しかし、実際はどのような職に就くか全くイメージが浮かびませんでした。今回、研修中に JICA や青年海外協力隊員のお話を聴かせて頂き、強い憧れを抱きました。そのような道も私の選択肢の一つとなると考えるようになりました。学業に関しては、考えることや学ぶべき事はもっと沢山あることに気づかされました。ここまで、大学で専門分野の勉強に励みたいと思ったのは初めてです。
- ・今回開発途上国に訪れたことは、私にとって意味のある貴重な経験でした。自分が日本で何の不自由もなく暮らす中、カンボジアの農村の子達は学校を卒業することも進学することも難しい状況にありました。この現状を知り、今後更に開発途上国について勉強し、将来少しでも彼らの教育に役に立つことがしたいと感じました。
- ・自分の置かれている環境について客観的に捉え、自分にできることやこれからの道筋について考えることができた。

Q 4. 本スタディツアーを経て、より長期の留学をしたいと思うか



学生コメント（上記の理由）

- ・いろいろなことにさらに挑戦したいと思うから。
- ・更に深く学びたいから。
- ・今回、他言語での日常会話ではなく、他言語で自分の意見を論じることの大切さと難しさ、面白さを学ぶことが出来た。次回は長期留学を経て、世界に通用するようなコミュニケーション能力、人脈づくりをしていきたい。
- ・ネパールにおける電力普及にもっと貢献したいと考えたため。
- ・もっと多くの人にインタビューをしたり、社会的に苦しんでいる人々と衣食住を共にし、より親密な話を聞きたいから。
- ・国内での勉強も今ところ充実しているから。
- ・もっと様々な国や環境を見て学びたいから。
- ・大学生になる前から英語圏に長期留学に行こうと決めていました。その大きな理由としては長期滞在すること、英語力を伸ばしたいことが大きかったです。しかし、今回カンボジアに行って、英語圏に行って何になるんだろう、日本でもっと勉強することはないのか、という思いも生まれてきました。実際、長期留学をしようという気持ちはあっても、具体的なビジョンやイメージがなかなか伴わなかったのも事実です。これからもう少し考えてみようと思っています。
- ・九日間という短い期間だったのもう少し深掘して勉強や調査をしたいなと思いました。
- ・より多角的な視点を持ち、相手を受け入れた上で、切磋琢磨しあえる人間になりたいと思うから。



Q 5. 本スタディツアー中、意欲的に取り組んだ内容やその成果について

- ・ジェンダーや異文化に関するインタビューに力を入れ、研究に役立てられた。
- ・医療と教育の関連性について取り組み、実際に関連性がわかった。
- ・今回のネパールスタディツアーでは、自分はジェンダーについて調べた。ジェンダーは非常にセンシティブな話題であると思ったので、事前の設問準備では消極的であった。しかし、自身のコミュニケーション能力を生かし、現地の人々とより深いレベルで話し合いができた。ネパールのジェンダー論をまとめる中で、日本におけるジェンダー論についても言及していきたいと思っている。
- ・私は、大学院で太陽電池の材料の研究をしていることもあり、ネパールにおける再生可能エネルギーの普及促進に興味があったので、そのことの理解を深めることを目的として今回の留学に参加した。代替エネルギー促進センターの職員や村の方々にお話を聞いたり、太陽光発電や小型水力発電を行っている農村を見学することで、電力が与えるインパクトについて、より深く学ぶことが出来た。また、ネパールにおける再生可能エネルギーの必要性や太陽電池の不十分さについても、身をもって知ることが出来た。
- ・カンボジア滞在中は、現地の人々をできるだけ自分に寄せて考え、インタビューをすることを意識した。政治的な変化がなぜ目覚ましく起きないのか、という問いに対して、彼らの住んでいる環境や教育の質から、まず変革を起こす以前にその根幹となる知識が不足しているのだと感じた。
- ・人の背景や現状をよく察し、インタビューを行うこと。
- ・開発途上国の暮らしについて学び、現地でインタビューを行いました。その国だけでなく、日本や世界のことも新しい見方ができるようになったと思います。
- ・出稼ぎの状況やそれに伴う問題を調査してきた。調査する中で、出稼ぎの背景に経済状況や教育の問題があることを知った。具体的な質問をして具体的な情報を得ることができるよう努めた。
- ・九日間のスタディツアーで、カンボジアの基本情報、そして教育、職業選択、移民に焦点を当て、農村と都市に住む人達にインタビュー調査をしてきました。職業と教育に焦点を当てて農村と都市の人たちにインタビューしてみると、双方でかなりの違いがあり、多くの発見ができました。また、月 10 台の車いすを無償で作る車椅子工房に見学に行きお話を聞き、その後車椅子を提供してもらった家族の家へインタビュー調査をしました。今後報告書を作り、人々に聞いたことやボランティア活動などを伝えていくことでカンボジアの人たちを助けることに繋がると信じています。
- ・カンボジアの教育制度や教育・教員の質について調査し、根本的な理由や改善案について考えることができた。

### (3) その他

実習実施にあたり、参加学生に対して、本学からの支援に加えて、日本学生支援機構(JASSO) 海外留学支援制度(短期派遣) による支援を活用した。

## 2. センター教員担当の全学共通科目・セミナー

### 2. 1 全学共通科目「NPO 入門」

本授業では、「NPO とは何か」を現場の活動に学びながら理解すること、NPO による社会問題解決の方法を、グループ・ワークや企画書の作成を通じて学び、自らの提案力、行動力を養うことを目的として授業を行った。本年度は 26 人の学生が受講した。授業前半では、市民社会や NPO に関する理論についての説明に加えて、NPO 活動の現場で活躍する方々をゲスト講師に呼びお話を伺う機会を 3 回設けた。また授業後半では、NPO の活動に不可欠なコミュニケーション能力を養成するため、学生による発表を含めて 3 回にわたって「NPO 事業計画書の作成」と題するグループワークに取り組んだ。

最初は NPO について漠然とした理解しかなかった学生も、授業における講義やゲスト講師からのお話を聴く中で、具体的なイメージを掴むことができたようであった。また、「NPO 事業計画書の作成」を通して、ミッション、ビジョン、ゴールなどに基づいた事業形成の考え方や、グループでコミュニケーションを図りながら考えをまとめ、それを発表することが身に付いたと考えられる。本授業の受講を、後述の「NPO インターンシップ〔実習〕」の履修をする上での義務としていたが、学生がインターンに臨むにあたって NPO の歴史的経緯や理論的枠組みを把握する役割も果たしたと思われる。

また、本授業にてゲスト講師による学内公開講座を 3 回実施した。これらの講義は当該の科目履修者だけでなく当該のテーマに興味を持つ本学関係者（学生、職員、附属高校生）の聴講を受け入れた。

日時： 2018 年 6 月 11 日（月）13：20～14：50

場所： お茶の水女子大学 本館 209 室

テーマ：「NPO 法人「えこお」とともに」

講師： 平岩 扶巳代氏（NPO 法人えこお事務局長）



平岩扶巳代氏

日時： 2018 年 6 月 18 日（月） 13：20～14：50

場所： お茶の水女子大学 本館 209 室

テーマ：「市民社会と SDGs：貧困のない持続可能な世界を目指して」

講師： 稲場 雅紀氏（一般社団法人 SDGs 市民社会ネットワーク専務理事）



稲場雅紀氏

※本公開講座は、グローバル協力センター主催第 4 回「持続可能な開発目標（SDGs）セミナー」との共催で実施された（詳しくは 2. 4 参照）。

日時： 2018 年 6 月 25 日（月） 13：20～14：50

場所： お茶の水女子大学 本館 209 室

テーマ：「NGO による途上国における教育支援」

講師： 山本 英里氏（公益社団法人シャンティ国際ボランティア会事務局次長兼アフガニスタン事務所長）



山本英里氏

2. 2 リベラルアーツ（LA）科目生活世界の安全保障 23「NPO インターンシップ〔実習〕」

本授業は、本学において 2003 年から文理融合リベラルアーツ科目の一つとして行われて

いる実習形式の授業である。実習生は、本授業を通じて、自らが選択した受け入れ団体となる NPO で年間最低 60 時間のインターンシップ（体験就業）を行う。本年度も、学生が NPO の活動に実際に参加し、その意義、役割、抱えている課題を実地に学ぶこと、社会活動の中で大学での学習・研究の課題を発見すること、将来にわたる社会と自分の関わりを考えるきっかけにすることの 3 点を目的に行われた。なお、本授業を履修するには、上述の講義「NPO 入門」を受講する必要がある。

本年度は、6 団体で学生 10 人（1 年生 1 人、2 年生 4 人、3 年生 3 人、4 年生 2 人）が実習を行った。受け入れ団体は、自立生活サポートセンターもやい、ST スポット横浜、えこお、チャイルドライン支援センター、シャンティ国際ボランティア会、シャプラニール＝市民による海外協力の会、の 6 団体である。各団体が取り組む分野は、貧困対策、芸術（演劇、ダンスなどの舞台芸術）、青少年育成、子ども・子育て支援、国際協力など、多岐に渡った。

個人面談などを通じて、実習生が、自身の関心のある分野について理解を深めてゆく様子や、時としてうまくいかず加藤しながらも成長してゆく様子などが垣間見られた。そうした一つ一つの挑戦や葛藤が、実習生の今後の糧になることが見込まれる。

今後、実習生が、NPO でのインターン経験を学業や研究において活用したり、将来の仕事を選ぶ際の材料としたり、また、どのようなライフステージにおいてであれ社会との関わりを考える際の助けとすることが期待される。

2019 年 2 月 2 日には、実習の集大成として最終報告会を実施した。学生を受け入れてくれた NPO 指導担当者の参加も得て、活発な意見交換が行われた。

日時： 2019 年 2 月 2 日（土）9：00～11：00

場所： お茶の水女子大学 本館 135 室カンファレンスルーム

テーマ：「2018 年度 NPO インターンシップ学生実習報告会」

講師：

上嶋 佑紀氏（特定非営利活動法人シャプラニール＝市民による海外協力の会国内活動グループ・チーフ）

鈴木 晶子氏（公益社団法人シャンティ国際ボランティア会広報課長）

松下 千夏氏（特定非営利活動法人自立生活サポートセンター・もやい交流事業担当スタッフ）

（五十音順）

## 2. 3 全学共通科目「平和と共生実習」「『平和と共生』実践演習」

2015 年 9 月の国連総会で、今後の国際社会、また開発途上国、先進国を含む各国の社会の方向性を考えるためのマイルストーンである「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ・持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals, SDGs）」が採択された。同

アジェンダ・目標は、「貧困の撲滅」を中心的な課題に据え、「飢饉の終焉」「健康な生活」「包摂的かつ質の高い教育」「ジェンダー平等」「人間らしい雇用（ディーセント・ワーク）」「各国内及び各国間の不平等の是正」「平和で包摂的な社会」等 17 の目標に掲げている。

本授業では、SDGs が取り上げる以下のテーマについて、現場の状況を理解するための文献・資料を取り上げ、テーマを巡ってどのような捉え方がされているのか、また、それぞれのテーマ同士がどう関係しているのかについて、プレゼンテーション、議論を通じて考察を深めた。また、援助を含め、どのような対応が可能なのかについても、ケーススタディを通じて議論を行った。特に現場の視点を持って考えていくことを重視した。

飢饉、貧困

労働移動、外国人労働者

教育、保健

農村の生活とジェンダー

不平等

## 2. 4 持続可能な開発目標（SDGs）セミナー

### （1）実施概要

#### 第 4 回

日時・場所：6 月 18 日（月曜 13:20～14:50）、於本館 209 室

演題：「市民社会と SDGs：貧困のない持続可能な世界を目指して」

講師：稲場雅紀氏 一般社団法人 SDGs 市民社会ネットワーク専務理事

※全学共通科目「NPO 入門」の履修生は、授業の一貫として受講。

#### 第 5 回

日時・場所：1 月 7 日（月曜 15:00～16:30）、於共通講義棟 1 号館 404 室

演題：「SDGs（持続可能な開発目標）に向けた取り組み：開発途上国の母子保健改善」

講師：萩原明子氏 JICA 国際協力専門員（保健）（本学文教育学部卒業生）

※グローバル文化学環「国際協力特論」の履修生は、授業の一環として受講。

### （2）参加者数

参加者のべ人数：68 人

内訳：第 1 回約 40 人、第 2 回約 28 人、（教職員含む）

### （3）内容

「持続可能な開発目標（SDGs: Sustainable Development Goals）」とは、2015 年 9 月の

「国連持続可能な開発サミット」（於ニューヨーク国連本部）において採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」中に掲げられる 17 の目標のことである。本セミナーでは、SDGs に取り組む専門家を国際機関、政府機関、NGO などから招聘して、様々な地球規模課題について多面的に検討した。

第 4 回セミナーでは、一般社団法人 SDGs 市民社会ネットワークの稲場雅紀専務理事をお招きして、「市民社会と SDGs：貧困のない持続可能な世界を目指して」と題するセミナーを実施した。

稲場専務理事からは、SDGs が必要とされる背景、日本における取組みの制度と現状、および、新しい時代の波を受けて変化する SDGs の将来などについて、様々な資料を元に詳しくお話があった。はじめに、稲場専務理事より、SDGs は「持続可能な開発目標」のことを意味するが、これが必要とされるということは、現代人が今の水準の生活を続けていくと世界そのものが続かない懸念がある、つまり「持続不能」の病により次世代に地球を引き継ぐことができないとの危機感が存在するとの指摘があった。具体的には、少子高齢化、格差と貧困、大量生産と消費、地球温暖化や災害などが挙げられ、参加学生の身の回りの問題と結び付けながら SDGs の重要性について説明があった。

SDGs の特色としては、前身のミレニアム開発目標（MDGs）とは異なり、開発途上国だけではなく先進国も含む包括性の高さがあり、また、MDGs の反省を生かして「最も厳しいところから取り組む」姿勢を重視しており、そうしたアプローチによって「誰ひとり取り残さない」ことを目指している点があるとの力強いお話があった。また、SDGs 達成における市民社会の役割については、SDGs 推進円卓会議に市民社会からも参画し、積極的な政策提言を行っていることなどが紹介された。

稲場専務理事からは、2017 年に日本で SDGs が広く社会に行き渡った感があるが、まだまだ課題が多いとの指摘があった。特に、サイバー（仮想）空間とフィジカル（現実）空間を高度に融合させたシステムで経済発展と社会的課題の解決を実現する人間中心の社会を構想する「ソサエティ 5.0」という動きに対して、これは格差を助長しないものなのか、過度に電力に依存したり過剰消費に至らないか、人工知能（AI）が人間から知的労働を奪うことは「人間中心の社会」と矛盾しないのか等、多くの議論が求められるとのお話があり、市民社会セクターに課せられた課題は多いことが察せられた。

最後の質疑応答では、SDGs と個人をつなぐものは何かという質問があり、例えば、食品廃棄をしない、ごみを減らすなどの個々人の日常的な心掛けで解決できることもある一方で、経済構造そのものを変えるために努力する必要もあるという側面も紹介があった。参加学生の多くが、社会変革を起こすためにはどうしたらいいか、そして、そのために必要な市民社会全体、あるいは、構成するひとりひとりの市民に期待されることについて真剣に考えていた。



稲場雅紀氏



第4回セミナーの様子

第5回セミナーでは、国際協力機構（JICA）国際協力専門員（保健）（本学文教育学部卒業生）の萩原明子氏をお招きして、「SDGs（持続可能な開発目標）に向けた取り組み：開発途上国の母子保健改善」と題して実施した。母子保健については、SDGsのゴール3「あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する。」の中で、「妊産婦の死亡率の減少」「新生児死亡率、乳幼児死亡率の減少」が掲げられている。講師の萩原明子 JICA 国際協力専門員（保健）は、これまで、ヨルダン、パレスチナ、ガーナ等で母子保健の改善に取り組んでこられているが、特に日本の母子健康手帳のこれらの国々での活用、特に母親のみならず、父親の育児の知識と参加の向上について興味深いお話を伺った。母子保健とジェンダーや不平等・紛争といった、SDGsの他のゴールとの関係についてもお話を伺うことができた。

卒業生のキャリアという視点からも、刺激になるお話しであった。

#### （4）参加者の反応

参加学生からの主な反応は以下のとおり。

（第4回セミナーのアンケートより抜粋）

- ・まず、持続可能な社会について考える前に「持続不可な社会」である現状を改めて受けとめるところから説明をして頂けて、SDGsについても詳しく聞けて、理解が深まりました。
- ・「誰一人取り残さない」というSDGsの精神がとても良いと思いました。SDGsが達成できるよう自分ができることは真剣に取り組む、次世代に地球を引き継いでいきたいと思いました。
- ・SDGsについて、目標やターゲットだけでなく、その誕生背景や経緯についても1つ1つ詳しく聞くことができ良かったです。

#### （第 5 回・母子保健）

講師が卒業生ということから、キャリアに関連する質問が多かった。また、途上国の女性の健康問題を見てきた立場から、日本の健康教育の問題をどのように考えるか、といった質問もあり、セミナー後も、メールでのやりとりが行われた。

#### （5）全体の評価

昨年度の食料、女子教育と日本政府の取り組み、平和構築に引き続き、今年度は、市民社会の SDGs への取り組み（第 4 回）と母子保健（第 5 回）についてのセミナーを開催した。第 4 回では、SDGs を巡る国際的、また日本における議論を紹介いただき、SDGs の意義の重要さと実施の難しさについて理解を深めるとともに、パートナーシップの重要性についても理解を深める機会となった。第 5 回は、母子保健、母子健康手帳という学生にとっても身近に感じることのできるテーマからはじめて、ジェンダー、不平等・紛争といった問題まで含む内容であり、ゴール間の関連についても理解を深めることができた。

#### （※注：当初の本セミナーの目標）

- （1）貧困、食料、教育、ジェンダー、不平等、環境、平和など、地球規模の課題であると同時に国内の課題でもあるこうした課題について、国際的な視野で理解を深める。
- （2）参加者各自の関心に応じたさらなる学習・研究への示唆を提供する。
- （3）地球規模課題に国際的に取り組む講師と接することで、今後のキャリア開発の参考とする。



### 3. 国際調査支援

#### (1) 実施概要

##### 1) 目的

「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の国際連携—」事業の一環として、本学大学院博士課程（前期・後期）学生による途上国開発、国際協力に関する現場に根ざした調査研究を支援するため、公募により選定された国際調査への支援を行う。

本事業は、以下の2つからなる。

- ①「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の国際連携—」の一環として、平成23年度から実施している国際調査支援。
- ②平成24年、卒業生故野々山恵美子様の遺贈により、アフガニスタンをはじめとする困難な状況にある開発途上国を対象とした調査、研究、実践のために設立された「アフガニスタン・開発途上国女子教育支援事業野々山基金」により平成25年度より実施している、開発途上国における女子教育分野の国際調査支援。

##### 2) 対象分野

- ①国連・持続可能な開発目標の17ゴールに関するテーマ（「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の国際連携—」）

2015年9月に国連で採択された先進国、開発途上国を含む普遍的な政策目標である「持続可能な開発目標」（Sustainable Development Goals: SDGs）の17ゴール（以下）のいずれかに資するテーマ

ゴール1. 貧困撲滅	ゴール10. 各国内及び各国間の不平等是正
ゴール2. 飢餓の終焉・栄養改善	ゴール11. 包摂的かつ持続可能な都市及び人間居住
ゴール3. 健康な生活	ゴール12. 持続可能な生産消費形態
ゴール4. 包摂的かつ質の高い教育	ゴール13. 気候変動の軽減
ゴール5. ジェンダー平等・女性女児の能力強化	ゴール14. 海洋保全
ゴール6. 水と衛生	ゴール15. 持続可能な森林管理、砂漠化への対処、生物多様性保全
ゴール7. 持続可能なエネルギー	ゴール16. 平和で包摂的な社会の促進
ゴール8. 包摂的かつ持続可能な経済成長・人間らしい雇用	ゴール17. パートナリーシップの強化
ゴール9. 強靱なインフラ・包摂的かつ持続可能な産業化	

- ②開発途上国の女子教育、基礎教育、ノンフォーマル教育に資する分野（野々山基金）

### 3) 支援内容

航空運賃、ビザ代、海外の調査地での宿泊費、その他センターが必要と認める費用を、20万円を上限として支給する。

### 4) 採択者、調査内容一覧

【国連・持続可能な開発目標の 17 ゴールに関するテーマ】

氏名	所属	調査期間	調査先	テーマ
Do Thi Thuy Quyen	ライフサイエ ンス専攻 M2	2018/8/6 ～8/24	ゴール (スリランカ)	Greywater discharge from household as a potential source of Pharmaceuticals Personal Care Products (PPCPs) to groundwater and surface water: A case study in Sri Lanka
市川 萌子	ジェンダー 社会科学専攻 M2	2018/8/2 ～8/30	バンコク (タイ)	タイにおける女性に対する暴力撤廃に取り組む NGO の役割と女性のエンパワーメント分析
内山 みどり	ジェンダー 社会科学専攻 M2	2018/10/4 ～10/18	シドニー (オーストラ リア)	ホスト社会との相互作用を通じた移民によるエスニック・コミュニティの生成と変容—シドニーに定住するビルマ・カチン系移民の実践に焦点を当てて—

### 5) 成果

調査結果について、報告会を実施した。また、調査報告書は、「国際調査報告書」として公開した。

今年度の採択者は3名とも修士2年生であり、本調査支援は修士論文作成のためのフィールドからの情報収集・調査に活用された。

(2) 調査報告書要約

**Greywater discharge from household as a potential source of Pharmaceuticals Personal Care Products (PPCPs) to groundwater and surface water: A case study in Sri Lanka**

Graduate School of Humanities and Sciences  
Division of Life Sciences M2 Do Thi Thuy Quyen

**Abstract**

This study is designed to investigate the situation of waste water management in Galle area, Sri Lanka. During the 3 week field investigation, questionnaire survey and water sampling plan was done as an effort to understand the general sanitary situation of the area. Due to the poor wastewater management, 75% greywater from household are directly disposed to the receiving water via the drainage canals. Moreover, there is a lack of guidance for the disposal of unwanted medicine and personal care products, which is indicated by 65% and 22% respondent answered that they will dispose to as garbage or flush to the toilet. This fact has risen the threat of the introduction of emerging contaminants into the water resource and the negative impact to the ecology and human health in case of chronic exposure. Water samples were extracted to determined the occurrence of pharmaceutical and personal care products in water resource. From this preliminary study, further work can be considered to help improve the sanitary facility in Galle area toward the United Nation goal number 6 Clean water and sanitation.

タイにおける女性に対する暴力撤廃に取り組む NGO の役割と女性のエンパワーメント分析  
The role of NGO which takes part in abolition of Gender Based Violence and women's  
empowerment analysis in Thailand

大学院人間文化創成科学研究科  
ジェンダー社会科学専攻 M2 市川 萌子

要約

開発において各国の改善すべき女性の状況として、女性に対する暴力の撤廃は上位を占めている。この問題に取り組み、暴力の被害を受けている女性を保護し、女性の自立支援を行うタイの NGO「女性の地位向上協会（Association for the Promotion of the Status of Women:以下 APSW）」を研究対象とし、NGO がどのように暴力の問題に取り組み、被害者である女性たちの状況を改善させているのか、APSW の提供するプログラムを通して女性たちが力をつけることによって得た変化の過程を考察した。本調査では、APSW のスタッフと、APSW から支援を受けている女性、過去に支援を受けていた女性にインタビューを実施したほか、ボランティアによる参与観察を行った。NGO スタッフにはタイ国内における女性に対する暴力の問題の現状や変化と、これまでどのように女性たちと向き合ってきたのか聞き取りを行った。ケース女性に対しては、APSW に来る前と後の変化と、APSW で受けているプログラムや活動について聞き取りを行った。

調査の結果として、NGO は長年の活動の蓄積もあり、あらゆる問題を抱えた女性を包括的に支援出来る体制や環境が整っていた。活動の上で、組織の理念や問題意識がスタッフに浸透していた。タイにおける今日の女性に対する暴力の問題は複雑化しており、組織は被害者を保護しケアするのみならず、暴力の廃絶に向けて、暴力の予防・啓発活動にも熱心に取り組んでいた。また、被害者に寄り添い行動することで彼女たちから信頼を得ていた。ケース女性たちは APSW に来て、様々なプログラムを受けることで、少なからず良い影響を受けていることが分かった。ソーシャルワーカーや他の女性との出会いで、勉強への意欲が湧き学校に行くことができた人や、職業訓練によって収入を得たことで施設を出て子どもと暮らすことを決意し、自立した人もいた。

ホスト社会との相互作用を通じた移民によるエスニック・コミュニティの生成と変容  
—シドニーに定住するビルマ・カチン系移民の実践に焦点を当てて—

Transformation in how migrants create, construct, and utilize their ethnic community  
by interacting with host community focusing on the practice of Burmese Kachin  
community both in Sydney and Tokyo

大学院人間文化創成科学研究科  
ジェンダー社会科学専攻 M2 内山 みどり

要約

本研究では、オーストラリア・シドニー近郊に定住するビルマ・カチン系コミュニティとそれを取りまく人々の実践の一端を聞き取りと参与観察により調査した。第三国定住プログラムによるマレーシア等からの流入により、信仰に基づく同胞コミュニティの内部にも構成員の渡豪背景に多様性がみられるようになった。それに伴い、同コミュニティの性質が変容し、信仰に基づく新たな同胞コミュニティが派生していったことも明らかになった。

カチン系のキリスト教徒であることを軸としつつも、様々な宗派や他の民族も受容してきたカチン系コミュニティおよびその成員の多くが運営に携わるカチン系政治・文化コミュニティの実践からは、シドニーの他ビルマ系団体や多国籍のキリスト教コミュニティとの交流に積極的な姿勢が垣間見えた。また、在豪カチン系移民 2 世の子どもたちを育てる親からは、子どもたちにとってのコミュニティの意義と同時に、家庭およびコミュニティが担う親の母語教育に対する課題もうかがえた。

今回は、東京での生活を経て日豪のカチン系コミュニティを経験した人々からコミュニティの活動や形態の特徴や相違点等に関して聞き取りを行うことで、その背景にある社会的環境が浮き彫りになった。

#### 4. 公開講演会・ラウンドテーブル

##### 4. 1 UNOPS アフガニスタン事務所長とのラウンドテーブル

###### (1) 実施日時・場所

平成 30 年 11 月 28 日（水曜日）15:00～16:30

第一会議室（大学本館 2 階 213 室）

###### (2) 目的

本イベントでは、ポール・クルクシャンク国連プロジェクトサービス機関（UNOPS）アフガニスタン事務所長の来日の機会を捉えて、同代表よりアフガニスタンの現状、同国で活動する中での困難、および、UNOPS がどのような事業展開をしているのか、等について報告をいただき、参加者とともに議論をするものである。治安悪化に伴い、2007 年 7 月より、アフガニスタンは退避勧告地域となっており、邦人の入国は厳しく制限されている。このため、現場の情報が不足していることから、学生、研究者、援助関係者の関心は高い。本イベントでは、クルクシャンク所長の 30 年以上に及ぶ（その内、10 年以上をアフガニスタンで勤務）平和構築分野での経験をもとに、同代表から、紛争国においてプロジェクト実施を進めることの難しさや現在のアフガニスタンの状況に対する自身の考えなどについて、エピソードを交えてお話しをしていただき、紛争に苛まれる国において恒常的な平和を築き発展に導く方策や将来の展望について広く考える機会とする。

###### (3) 参加者

21 人

###### (4) 内容

国連プロジェクトサービス機関（UNOPS）アフガニスタン事務所長のポール・クルクシャンク所長をお招きして、ラウンドテーブル・ディスカッションを開催した。当日は、アフガニスタンに関心を持つ実務家、研究者、及び、本学教職員の 20 名超の参加を得て、活発な意見交換が行われた。

クルクシャンク所長は、アフガニスタンにおいて平和構築分野で 10 年以上の勤務経験を持ち、インドネシア（バンダアチエ）、コソボ、イラク、南スーダン等の紛争国及び被災地における治安部門改革や災害救援の分野で合計 30 年以上の経験を有している。今般、同所長が来日するに当たり、UNOPS 東京事務所から当センターまで何らかの連携ができないかとの打診があり、実現に至った。

原副センター長による歓迎挨拶の後、クルクシャンク所長より、UNOPS のミッション、活動概要、アフガニスタンの歴史と現在行われる国際援助の位置づけ、UNOPS アフ

ガニスタン事務所が実施するプロジェクトに関する説明、平和構築における女性の役割等についてプレゼンテーションがあった。

まず、UNOPS は、国連機関の中で唯一、国連本部からのコア予算を受け取っており、全ての活動がプロジェクト単位で実施されており、経営手法は非常に民間セクターに近いとの説明があった。続いて、アフガニスタンの歴史を概観しながら、歴史的教訓は現代においても参考にすべきであるとお話しされた。その後、UNOPS アフガニスタン事務所が実施する、道路建設、除雪・雪崩対策、病院・大学・空港改修事業、再生可能エネルギーを用いた給水・電力供給プロジェクト等について詳しく説明があった。

クルクシャンク所長からは、UNOPS にとって日本は信頼ができ、また、最も長い関係があるドナーの一つであり、タハール県での国境管理プロジェクト、ゴール県やバーミヤン県における道路建設プロジェクト、カブール大学校舎建設プロジェクト等で密接な協力関係にあるとお話しがあった。また、平和構築・復興支援における女性の活躍は、着実に活動国の経済成長を促すこと、国連安保理決議 1325 号に基づき和平プロセスにも参加し貢献できること、そして、持続可能な開発目標（SDGs）のゴール 5（ジェンダー平等の達成）にも挙げられているように重要であることを強調した。

質疑応答では、治安、政治、社会・経済、ドナーの援助疲れ、難民の課題など、幅広い分野について活発な議論が交わされた。また、治安情勢が不安定なアフガニスタンにおいて、どのように有効に、且つ、説明責任を確保してプロジェクト運営をするのかについても多角的に議論がなされた。



クルクシャンク UNOPS アフガニスタン事務所長



ラウンドテーブルの様子

#### 4. 2 公開講演会「アフガニスタン自立への展望：平和と安定に向けた日本の支援の役割」

##### (1) 実施日時・場所

平成 31 年 3 月 4 日（月曜日）13:30～15:00

本館 306 室

##### (2) 目的

本講演会では、鈴鹿光次アフガニスタン・イスラム共和国駐箚特命全権大使より、アフガニスタンが国際社会からの支援への依存から脱却し自立して発展してゆくためには何が求められるのか、どういった課題が存在するのか、そして、同国の平和と安定に向けて日本が果たすべき役割は何か、等について参加者とともに議論を深める機会とする。本学は、2002 年から五女子大コンソーシアムの枠組みで指導的女子教育者研修等を通じてアフガニスタンの女子教育支援に取り組み、2003 年 7 月には「開発途上国女子教育協力センター」（2008 年 4 月に「グローバル協力センター」に改組）を設置、同国の女子教育支援を通じた復興支援に深く関わってきた。こうした本学の取り組みを踏まえて、アフガニスタンの自立に向けた様々な課題と今後の展望について議論する。

##### (3) 参加者

80 人（当日参加 10 人）

##### (4) 内容

今次公開講演会には鈴鹿大使より、アフガニスタンが自立に向けて着実に歩むためには何が求められるのか、特に、日本の支援の役割に焦点を当ててお話し頂いた。全体の構成は、概ね、(1)アフガニスタンの概要、(2)アフガニスタンの現状と課題、(3)日本の支援、(4)その他、であった。

鈴鹿大使から、第一に、アフガニスタンの概要（地理、民族、部族、近現代の歴史等）について説明があった。なぜ、諸外国がアフガニスタンを注意深く見ているかについて、アフガニスタンが策源地となり 9.11 が発生してしまったことを挙げ、再びテロの温床にしないことが重要とのお話があった。

第二に、アフガニスタンの現状と課題について、内政、外交、治安、戦況、経済状況等、テーマごとに詳細な現状に対する説明がなされ、それぞれにおける対応すべき課題を提示した。

続いて、第三に、日本は世界で第 2 位のドナーとして、治安改善、元ターリバーン兵士等の社会への再統合、そして、農業・インフラ・人作りを中心とする開発を柱として支援しているとのお話があった。その中で、「治安・和平」の問題があらゆるセクターに影響を与える発展のボトルネックとなっており、同問題の解決が焦眉の課題であるとのお話



があった。また、日本の NGO と協力しながら、日本古来の伝統的な技法を用いて灌漑用水路の整備、並びに、緑化プロジェクトを推進しており、アフガニスタン政府からも高い評価を得ている旨説明があった。また、法秩序信託基金（LOTFA）を通じた女性警察官への訓練、JICA の技術協力を通じた都市開発計画等についても詳しくお話しがあった。

総括として、まずは、アフガニスタンに平和をもたらすことが重要課題であり、その後に民間セクターを発展させること、その中で中心的な役割を担うのが農業となるであろうとの結論が述べられた。最後に、日常の業務として、国連機関との交換文書の署名式の様子、駐留外国軍・外交団との外交の現場の様子、アフガニスタン社会の様々な方々との交流などについて、写真を交えてエピソードが語られた。

（５）参加者の感想（参加者 80 名の内、回収アンケート数 55 枚。）

- ・アフガニスタンの教育、人材育成に関わる中で、鈴鹿大使より現地の状況、情報を直接ご教示いただいたことは業務遂行にあたり非常に有益でした。ありがとうございました。

（30 代、女性）

- ・とても興味深いご講演を企画して下さい、ありがとうございました。厳しい治安状況の中で、人々のために前向きにご尽力されるお姿に大いに感動しました。又、お話しを伺いたいです。（50 代、女性）

- ・大変わかりやすく、アフガニスタンの現状にかかる全体像を知ることができた。（40 代、男性）

- ・現在のアフガニスタン情勢について具体的和平へのプロセスを説明してもらえてよかったが、アフガニスタンの将来にもう一つ光が見られない現状を残念に思う。また裏情報が興味深かった。（60 代、男性）



会場の様子



講師の鈴鹿大使

## 5. 大学間連携イベント

### 5. 1 『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方

#### (1) 実施日時・場所

平成 30 年 6 月 16 日（土曜日）10:00～17:00

本館カンファレンスルーム（135 室）

#### (2) 目的

国際協力の現場における課題発見・解決を促す実践的な手法である「対話型ファシリテーション」について参加学生が学ぶとともに、このような対話法を用いることで、現場に存在する根本的なニーズの把握が可能となり、その結果、外部者による援助の在り方に影響を与えるということを疑似体験し理解することを目的とする。また、将来的には、参加者各人の学習・研究・実践の様々な場面で応用されることを目指す。

#### (3) 参加者 20 人（参加申込者数 22 人、うち当日欠席 2 人）

・お茶の水女子大学生（13 人）、内 4 人は大学院生

・他大学生（7 人）

横浜国立大学大学院（2 人）、奈良女子大学（5 人）

#### (4) 内容

今回の大学間連携イベントは、認定 NPO 法人ムラのミライ海外事業チーフの前川香子氏をお招きし、「対話型ファシリテーション」に関する講義、実践練習、グループワーク・発表などを含む参加型ワークショップ形式で実施された。

冒頭、前川氏より、南アジア地域での村落開発プロジェクトを形成する上での失敗談などを交えつつ、「対話型ファシリテーション」手法が生まれる経緯ときっかけについてお話があった。それまで、村人のニーズに沿ってプロジェクト企画を立案・実施していたつもりだったが、上手くいかないこともしばしばだったとのことであった。しかし、村人の感情や考え・認識ではなく事実について問う「事実質問」を積み重ねたところ、正確なニーズの把握が可能となり、そのプロセスを分析して「対話型ファシリテーション」手法が開発されたとのことであった。

本イベントでは、事実を聞き出すための技術について、使ってはいけない疑問詞、使っても良い疑問詞に関するレクチャーや、途上国における対等な人間関係作りの重要性、対話の切り出し方などについて詳しい説明があった。その後、実践練習①として、ペアで「事実質問」の練習が行われた。

続いて、グループに分かれて、写真を 1 枚選び、その写真の中から知りたいテーマを設定し、その写真の場面からどのように質問を組み立てられるか考えてみるグループワーク

が行われた。グループでの討論の結果を発表し合い、参加者間の理解を深めた。

最後に、実践練習②として再びペア練習が行われ、「対話型ファシリテーション」手法を用いてお互いの「改めたい習慣」について会話し、その人自身が改善策に気付くように手助けするファシリテーションの練習を行った。

参加者の中には、フィールド調査や国際協力の実践に取り組む学生もあり、今回学んだ内容を活かすことが期待される。

#### (5) 参加者の感想

- ・ものすごく刺激的で楽しかったです。以前からムラのミライさんの活動に興味を持っていたので、いい機会を提供して頂き有難うございました。

- ・対話型ファシリテーションは予想以上に難しかった。前川さんのお話を聞いていると単なるリズミカルな会話のように聞こえたが、実践してみると、質問がなかなか出てこなかった。相手に教えるのではなく、気付かせることが大切だということが印象的だった。

- ・国際協力だけでなく、日常生活の課題解決についても幅広く応用できる内容になったので活かそうと思った。

- ・実際にネパールを訪問するにあたって、どのような質問をして良いのか良く分からなかったものでとてもためになった。ネパールで実際に役立てたい。



↑講師の前川香子氏。



↑ペアで「事実質問」の実践練習。



↑フィールドワークをイメージしてグループワーク。



↑グループ発表の様子。

## 5. 2 「被災者の尊厳の視点から考える紛争・災害時の人道・緊急支援～スフィア・スタンダード、教育ミニマムスタンダードに学ぶ～」

### (1) 実施日時・場所

平成 30 年 12 月 22 日（土曜日）10:00～17:00

本館カンファレンスルーム（135 室）

### (2) 目的

近年、日本を含め、世界的に自然災害が多発し、長期にわたり避難所等で不自由な生活を送る人々が増加している。また、多発する紛争により、生活の場を追われ、難民キャンプ等での生活を余儀なくされる人々も増加している。本ワークショップでは、人道・緊急支援に関する国際基準に初めて接する学生を対象に、最新の国際基準の内容、実践への応用などについて学ぶとともに、その背景にある原則や考え方、現場のニーズに即した支援について学び、国内の災害援助のあり方、また、海外における人道・緊急支援のあり方について、広く考える機会とする。

### (3) 参加者 25 人（参加申込者数 27 人、うち当日欠席 2 人）

・お茶の水女子大学生（15 人）、内 1 人は大学院生

・他大学生（10 人）

上智大学（4 人）、奈良女子大学（5 人）、英国キングス・カレッジ・ロンドン大学院（1 人）

### (4) 内容

今回の大学間連携イベントは、支援の質とアカウンタビリティ向上ネットワーク

（JQAN）／難民を助ける会（AAR Japan）の五十嵐豪氏をお招きし、人道・緊急支援における援助の質とアカウンタビリティに関する講義、実践練習、グループワーク・発表などを含む参加型ワークショップ形式で実施された。同ネットワークの松尾沢子氏（国際協力 NGO センター）、石井宏明氏（難民支援協会）にもご支援いただいた。

冒頭、講師・参加学生を交えた自己紹介セッションの後、スクリーンに投影された数枚の絵を見て、想起される課題について各グループで話し合われた。このエクササイズを通して、援助者と非援助者の間の非対称な力関係、難民支援の際に生じ得る難民とホストコミュニティの軋轢、人道・緊急支援時の公平性などについて理解を深めた。続いて、人道・緊急支援の国際基準がなぜ生まれたのか、その背景と歴史、過去の教訓、及び、基本原則について、講義形式で説明があった。その後、「スフィアプロジェクト」の歴史、ハンドブックの構成、並びに、権利保護の原則、栄養、保健、給水・衛生、シェルター等の各分野の全体の中での位置づけなどについて詳しく説明があった。

午後のセッションでは、「人道支援の必須基準」に提示されている 9 つのコミットメントについて、記憶に定着するようゲーム形式で学習を行った。また、「スフィア・スタン



ダード」に記載されているテクニカルチャプターの見方を、最低基準、基本行動、基本指標、ガイダンスノートの分類ごとに詳しく見た上で、給水を事例として具体的に学んだ。こうしたエクササイズを経て、「スフィア・スタンダード」はハウツー本であるという一般的な誤解を払拭するとともに、緊急時の教育、子どもの保護、経済回復、高齢者・障がい者インクルージョン等の関連文書の見方も学んだ。

事例として、架空の被災地における様々な問題を抱えた避難所運営を取り上げ、事例のどこか問題なのか、「スフィア・スタンダード」のどの部分が対応しているか、具体的な対策は何か等について、グループワークを通じて議論を行いフロアに発表した。総括として、JQAN 講師が講評を行い散会となった。

#### (5) 参加者の感想（アンケート抜粋）

- ・ワークショップ形式で国際開発について考えていく機会は今までなかったので、とても勉強になりました。楽しみながらという表現がよいのか分かりませんが、楽しみつつ身につく講義で、今回学んだことを実践する場があれば積極的に活かしたいと思います。
- ・講師の先生の分かり易くて面白い講義に大変満足しています。人道支援に関しては全くの無知でしたが、1日の講義・ワークショップを通して多くの知見を得られました。遠方からの参加でしたが、来てよかったと思えるとても有意義な1日でした。
- ・普段接する機会の少ない所属の方とお話が出来て良かったです。
- ・人道支援に特化した内容は学ぶ機会が少ないので、有意義な時間だったと思う。



↑ 講師の五十嵐豪氏。



↑ ケーススタディ中の避難所の問題点について考える参加者。



↑ グループワークの内容を発表する参加者。



↑ JQAN 講師による講評。

## 6. 「共に生きる」スタディグループの活動

平成 23（2011）年度に発足した「共に生きる」スタディグループは、学部・学年にかかわらず平和構築と国際協力、ボランティア活動等に関心をもつ学生が参加し、自主的な活動とその成果を発信している。

平成 30（2018）年度は、4 月に 2 回の説明会を開催して新規メンバーの参加を呼びかけるとともに、途上国の教育支援、難民支援を実施している学生グループの活動紹介、及び「日中学生会議」参加学生による活動紹介を行った。年間を通じて、学生有志による展示、不用品回収・物品販売、途上国支援の報告セミナーなどが実施され、学生による国際協力実践を推進するとともに、ホームページを通じてグローバルな課題へのキャンパスでの実践について発信した。



SFT による活動紹介



日中学生会議活動紹介

### 6. 1 学生自主活動

以下、学生が作成した活動に関するホームページ記事を掲載する。

#### 6.1.1 学生企画「ビジネスから社会を変える～NPO 法人 CROSS FIELDS による講演会」実施報告

本学では国際協力や NGO/NPO 活動に興味をもつ学生は多い一方で、卒業後の進路としてそういった道を選択する学生は少ないと思います。これはキャリア設定の中で、国際協力や NGO/NPO などの社会貢献に関わる仕事が身近だと感じにくいことが理由ではないかと考えました。そこで企業で働きながらも NGO/NPO 活動が可能であること、また、NGO/NPO が身近な存在であることを認識してもらうために、「ビジネスから社会を変える」をテーマに NPO 法人 CROSS FIELDS による講演会を企画しま



講演会の様子

した。NPO 法人 CROSS FIELDS は企業・行政・NPO がパートナーとなり、次々と社会の課題を解決する世界を目指し、2011 年に小沼大地さん・松島由佳さんによって創設された NPO 法人です。企業の社員を新興国の NPO や社会的企業に数か月にわたって派遣し、本業のスキルや経験を活かして現地の課題解決に貢献する「留職」プログラムを主として様々な事業を展開しています。日経ソーシャルイニシアティブ賞新人賞（2014）や Japan Venture Awards 2015 グローバル人材支援特別賞など多くの賞を受賞している NPO 法人です。

講演会は、2018 年 7 月 18 日に、NPO 法人 CROSS FIELDS の西川里菜さんを講師として行われました。西川さんからは NPO 法人 CROSS FIELDS についての概要、現在担当されているお仕事について、またご自身のキャリア設定や学生時代についてなどのお話がありました。特に、西川さんが、なぜ NPO 法人 CROSS FIELDS で働くことを決めたのか、という自身の経験に基づくお話が印象的でした。また当日はワークショップの中で「社会人に対するイメージ」について学生同士で話し合いをするなど、活発な講演会になりました。参加した学生からは「就職活動など将来について考える良い機会となった」「社会貢献に対して現地に赴く活動に焦点を当てがちだったが、このような関わり方があることを知った」などの感想が挙がりました。本講演会を通して、ビジネスから社会を変えることは可能であるといった新たな視野を広げることが出来る貴重な機会となりました。

（文教育学部言語文化学科グローバル文化学環 2 年 長村 瑠納）

#### 6.1.2 フェアトレード商品委託販売

2018 年 11 月 3 日・4 日に、徹音祭の学術企画の 1 つとして、NPO 法人「シャプラニール＝市民による海外協力の会」のフェアトレード商品委託販売を行いました。シャプラニールは、バングラデシュやネパールで貧困に悩んでいる人達に様々な活動を通して支援を行っている団体です。現地においての教育や防災などの支援活動、切手などいらぬものを日本各地から回収して換金し、活動の資金



会場の様子

に充てる「ステナイ活動」、バングラデシュやネパールの女性が手作りしたフェアトレード商品の販売などを行っています。途上国の人達が自分達で生活していけるような支援を行っています。私達は、LA 科目「NPO インターンシップ」の一環で、シャプラニールで実習をしています。

フェアトレード商品を販売するにあたって、私たちがもっとも大切にしたいと思った事はフェアトレードの仕組みを理解して頂く事と、その商品はどのような人がどのように作



っているかを知っていただく事です。そこで、商品についての説明を書いたポップを用意しました。シャプラニールさんからいただいた資料を元に、特に知っていただきたいことをまとめた、見やすいポップ作りを意識しました。当日は、まずは商品を見ていただこうと声かけを行い、多くの方に立ち寄っていただけました。自分達から積極的にフェアトレードや商品について説明すると、熱心に聞いてくださる方が多かったことに、とてもやりがいを感じ、二日間イキイキと活動する事ができました。



商品の販売

今回私達は仕入れた商品を全て売りきることができました。それは三人全員が、ボランティアで学んだこと、途上国の現状やフェアトレードについて、伝えることができただけでなく、来てくれた多くの方が日頃からそのような国際問題に対して関心を持っていたからではないかと思っています。しかし多くの人がフェアトレードの言葉は知っているが、詳しくは分からないという現状も把握できました。ですのもっと私達はボランティ

アを通じて学び、まずは自分達の身の回りから、きちんと伝えていかなければならないと思いました。

日頃、ボランティアの際にフェアトレードを始めとした国際協力に関して沢山のことを教えて下さっているシャプラニールの皆様、今回微音祭においてこのような機会を下さりサポートして下さったグローバル協力センターの方々、一緒に販売を行うことができた仲間感謝いたします。

(文教育学部3年 清水 あかね、2年 山田 亜実、理学部1年 泉 さらら)

### 6.1.3 OCHANAN 活動報告

OCHANAN はお茶大生 (OCHA) が難民 (NAN) にアクションを起こすために2016年度からスタートした有志メンバーの団体です。昨年に引き続き、2・3年生合せて9人で活動しております。今年度は、数人のメンバーが海外留学に出たこともあり、イブラ・ワ・ハイトの商品の販売 (準備・手伝い含む) をメインに行いました。

4月：代々木公園にて行われたイベント『アースデイ東京』で、商品販売のお手伝いをしました。

7月：六本木グランドタワーにて行われたイベント『東京アラビアンナイト』で、商品販売のお手伝いをしました。

9月：文京シビックホールにて行われた、半期に一度の梱包会に参加させて頂きました。



11月：微音祭にて、商品を販売しました。昨年は微音祭両日行いましたが、今年は人手不足のため1日のみで行いました。1日だけで、さらに昨年より1日の時間も短かったにもかかわらず、多くの方に見に来ていただきました。説明を熱心に聞いてくださる方自ら質問して下さる方が多く、難民という言葉も知らないほどの小さいお子さんも刺繍小物を可愛いと言って見てくださり、そのような方々にこれから難民についてもっと知っていただけると嬉しいです。



微音祭での商品販売とポスター展示

難民という言葉、難民問題について知識のある方が増えるように、日本でもっと自分ごととして捉えられるように、私たちはこれからも活動していきたいと思います。

OCHANAN が活動するにあたりまして、グローバル協力センター、イブラ・ワ・ハイトをはじめとする皆様の温かいご支援・ご協力に、心より感謝申し上げます。

(文教育学部2年 岡 秋桜花)

#### 6.1.4 STUDY FOR TWO お茶の水女子大学支部 2018 年度活動報告

私たちは「勉強したいと願うすべての子どもたちが勉強できる世界に」という理念のもと、大学生から寄付していただいた中古の教科書を学内で定価の約半額で販売し、その収益をラオスとバングラデシュの子どもたちの教育支援のために一般社団法人 STUDY FOR TWO を通しクフしています。

そして今年度も、お茶大支部では春と秋の2回の教科書販売及び冬に行ったブックフェアでの売り上げから、合計27万円を超える寄付をすることができました。また、夏と冬に2回不要になった教科書の回収を行い、それに加えて学内と寮にあわせて7つ設置させていただいている回収箱を通しての回収も、強化して行いました。そして何より、教科書の寄付と購入を通し国際協力ができるという私たちの活動の魅力をお茶大生に知って



10月に行った教科書販売の様子

いただくべく、支援の仕組みを詳しく掲載したビラづくりを行い、寄付および購入の際に国際協力を身近に感じることができるよう工夫しました。

また、学内の活動に限らず、全国の50を超える大学に支部を置く STUDY FOR TWO



8月に行われた全国合宿の様子

活動の成果を肌で感じることができました。

最後に、教科書の寄付、購入をしてくださったお茶大生の皆さん、またご協力いただいたすべての方に感謝申し上げます。来年度もお茶大生と途上国の子どもたちを繋ぎ、国際協力をより学内に浸透させるとともに、より多くの子どもたちを支援することができるよう支部員一同頑張っていきますので、よろしくお願い致します。

(SFT お茶大支部代表 文教育学部1年 立石 桐子)

の強みを活かし、年2回の全国合宿や毎月行われている地区ごとの勉強会への参加を通して他大学のメンバーとの交流も多く行いました。

9月に行われたスタディツアーではお茶大支部から2名が参加し、支援先の1つであるラオスを訪問しました。奨学金を受け取っている子どもたちの自宅訪問や学校の様子の見学、子どもたちや村の大人たちとの交流を通して、学内で行う



スタディツアーにて支援物資の贈呈の様子

この他、2018年9月11日、本年度「国際共生社会論実習」スタディツアー参加学生（理学部数学科1年生）が中心となり、NGO「クロス」代表の檜戸健次郎先生（家庭医・元日本キリスト教海外医療協力会ネパール派遣医師）をお招きした自主企画セミナーが開催された。20年以上、南西アジアに位置するネパールでの医療協力に従事している檜戸先生とのディスカッションと質疑応答を通じて、ネパールに対する理解を深めるだけでなく、開発途上国における保健・医療の状況、途上国の人々とどのようにコミュニケーションを図るべきか、及び、今後の学習やキャリアについて考えた。

## 6. 2 「国際共生社会論実習」 微音祭（大学祭）における展示・発表

2018年11月3日（土）と4日（日）に開催された微音祭（学園祭）において、「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」スタディツアー参加者による調査結果の発表を行った。

### （１）ネパールスタディツアー

2018年11月3日（土曜日）～4日（日曜日）に開催された微音祭（学園祭）において、「国際共生社会論実習」ネパールスタディツアー参加者によるフィールドワークの成果発表が行われました。

#### 「ネパールの電力問題」

ネパールは、世界最貧国の1つに含まれる開発途上国であり、慢性的な電力不足に苛まれています。水資源が豊富であり、水力発電に適した風土を持ちながら、あまり開発が進んでいないために、一日に何時間もの計画停電を実施しなければならない状況です。私は太陽電池の材料の研究をしているので、太陽電池でこの状況を改善できないのか、と考えたのが調査のきっかけでした。今回の調査では、代替エネルギー促進センターや地方の村に行ってお話を伺うことができました。そこで学んだのは、電気がもたらすのは生活の質の向上だけではなく、教育・衛生・ジェンダーなど様々な問題の改善をももたらすということです。電気が利用できることの素晴らしさに気がつくとともに、再生可能エネルギーの普及の必要性についても痛感しました。今回ネパールを訪れることで、太陽電池の発展に貢献したいという想いが強まりました。このような機会を得られたことに大変感謝します。（三田寺 舞）

#### 「ネパールの伝統に残るジェンダー問題」

現地では、JICA ネパール事務所や外務省など支援活動をしている日本の団体の方々へのインタビューのほか、大学病院や村などへも訪れて、実際に現地で問題になっていることや、ジェンダー問題についてどう考えるかについて伺うことができました。一つ一つのインタビューや見学が全て有意義で実りのある調査になったと思います。ネパールで強く残る文化や習慣を問題視し、どう対処するかについて、JICA のような支援活動を進める団体は、部外者である自分たちが直接介入するのは困難であるため、間接的に、インフラの整備や女性の社会進出などをすすめることで支援しているということでした。調査の中で特に印象に残ったのは、こうしたインフラの整備が問題を解決する手助けになるということです。今回の調査を通して自分の考えを深めることができたので、この経験はこれからの自分の学習のために欠かせないものとなりました。（蒲田 凜）

#### 「ネパールの教育と医療の現状」

現地では、実際に病院や学校、教育支援団体を訪れました。その中で、事前調査時に調べたことと現状の違いや、現地に行かないとわからないことが多くあると感じました。医療面においては、「衛生問題」という一つの言葉に予想以上の意味があると感じました。また、現地の高校に行き、生徒等と会談する中で彼らの意識の高さを実感しました。ネパールは、新たに保険制度を採り入れ、教育制度、保険制度など今も改善されています。しかし、頭脳流出の問題は大きな問題でありながらあまり注目されておらず、改善されていないと

感じました。また、諸外国が行う支援の意図と自国の意図が違うようにも感じました。このように意識の違いや制度、設備等にまだ改善できる点があると実感しました。(足立 晴日)

#### 「ネパールで考える女性の人権」

現在、ネパールの都市部ではジェンダーに関する先進的な活動が生まれています。一方、農村部ではそもそも男女の権利の差を感じませんでした。出稼ぎの増加やインフラ整備の充実によって欧米のジェンダー規範と頻繁に接触し、ジェンダー問題を感じるようになるかもしれません。支援者側の我々はただ問題を指摘し一方的な支援をするのではなく、ネパールの人自身が自ら求めたことに対して支援し、彼らが彼ら自身の想像力で自らの未来を描くことに協力して行くことが大切であると思いました。震災復興も教育も経済発展も、支援者側だけではなく、彼らの意識の変化が国の発展への道しるべとなると思います。事前学習からの学び、実際にネパールを訪問し感じた学び、その後自身の興味関心に基づき深めた学びのまとめとして、微音祭での成果発表は非常に良い機会となりました。(肥後 夢乃)

授業としては、今回の報告会が最後のプログラムになるかもしれませんが、私たちにとって「共に生きる」という課題について考える歩みはまだこれからだと思います。沢山の方にご来場いただき、数多くの質問をしていただきました。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

(理学部化学科 1 年 肥後 夢乃)

#### (2) カンボジアスタディツアー

2018 年 9 月 15 日から 9 月 23 日まで、「国際共生社会論実習」カンボジアスタディツアーが行われた。参加者は 1 年生 3 名、2 年生 1 名、3 年生 2 名、計 6 名である。

出発前の 6 月から 8 月にかけて約 6 回の事前学習や安全講習を行った。現地における質問方法に関する講演や JICA の国際協力専門員によるジェンダー主流化プロジェクトに関する講演の他、複数の文献を読んで参加者同士で議論し多様な意見を得ながら、カンボジアの歴史や一般的な政治・社会・経済の現状の理解を深めた。そして、事前学習をふまえ、参加者それぞれが現地での調査テーマを固めていった。カンボジアにおける教育、職業選択、出稼ぎ、ダンスなど各人の専攻や興味・関心に沿った調査テーマであった。

現地 1 日目は首都プノンペンに滞在した。ビルやおしゃれなカフェなどが建ち並び、大型車両がひしめき合っているという想像上の発展に参加者皆驚いた様子であった。2 日目に農村における聞き取り調査のため、プノンペンから車で 2 時間ほどの場所に位置するカンボジア東部の州・コンポンチャムに移動し、3 日目から本格的に調査を開始した。コミュニケーション・チーフや小・中学校の校長先生、出稼ぎ家庭、高等教育を受けた子どものいる家庭など様々な人々にインタビューをすることができ、各自調査課題についての考察を深めることができた。調査後プノンペンに戻った後、5 日目は王立プノンペン大学にあるカンボジア日

本人材開発センター（CJCC）を訪問した。ポル・ポト時代を生き抜き、カンボジアの伝統舞踊アプサラの復興に取り組んできた方の講演を聴くことができた。ポル・ポト時代に、男女の関係や結婚がポル・ポト政権によって支配されていたという内容が特に心に残っている。

また、CJCC で日本語を学んでいる同年代の学生と交流する機会を得た。農村の学生に比べて将来の夢の選択肢が幅広いという印象を受け、都市と農村の間の格差を感じた参加者が多かったようである。6 日目には Wheel Chair For Development（WCD）の車いす工房を訪問し、WCD のディレクターや AAR Japan（難民を助ける会）のカンボジア駐在員からそれぞれの団体の取り組みについてうかがった。WCD は個人の障害の状態にあった車いすを製造し、障害者の社会参加を後押ししている。AAR はカンボジアではインクルーシブ教育推進事業を進めるほか、WCD に対して財政面・運営面などで支援を行っている。工房では障害をもつ方を含めたカンボジア人スタッフが丁寧に車いすを製造している。我々も車いすに乗り、操作や乗り心地を体感することができた。車いす受益者訪問では、車いすのおかげで家族の負担がかなり減ったという生の声を聴くことができた。7 日目は、JICA カンボジア事務所を訪問し、JICA カンボジア事業概要の説明を聴いたり、各自のテーマに沿った質問をしたりした。JICA は多方面での支援に携わっていることが分かった。青年海外協力隊員のお二人からはカンボジアの活動について説明していただく時間もあった。同年代の人々が青年海外協力隊員として活動していることに私は刺激を受けた。8 日目は、トゥールスレン虐殺博物館を見学した。この博物館はポル・ポト時代にクメール・ルージュによって人々が収容されていた場所である。人々が収容されていた状況を物語る写真や独房を目にし、当時の人々がどれほど残酷な目に遭っていたのかということを実感した。思わず目を背けたくくなるようなほどであったが、話を聴くだけでは理解できない当時の恐怖を感じることができた。

以上、約一週間という短い期間ではあったが、多くの人々や機関を訪れて考えを深める機会があり、非常に充実したスタディツアーであった。視野が広がり考え方も多様になったと感じている。また、実習を通して、都市を中心に物理的な発展はみられるものの、教育の質の悪さや汚職の横行、法律の不遵守など様々な問題があることを目の当たりにした。見えにくいところ、見ようとしなければ見えないところが依然として発展の途上にあるのだと感じた。この経験をこれからの大学での学びや将来に活かして見せる。

最後に、この貴重な経験をすることができたのは、現地での同行及び通訳をしてくださったポマさんやインタビューを受け入れてくださった方々をはじめとする現地の皆様ほか、関係者の方々のおかげであり、感謝の気持ちでいっぱいである。

（文教育学部言語文化学科グローバル文化学環 2 年 酒井 麻佑子）

IV. 開発途上国の女子教育・  
幼児教育に関する支援事業  
(教育・研究成果の国際社会への還元)





## 1. アフガニスタン女性教員・研究者の短期研修（野々山基金）

### （1）概要

平成 24 年 1 月に設立された本学卒業生の故野々山恵美子様からの遺贈を原資とする「アフガニスタン・開発途上国女子教育支援野々山基金」の事業の一環として、アフガニスタン女性教員・研究者の受け入れを平成 24 年度に開始した。本研修は、アフガニスタンの女性教員・研究者を取り巻く環境が厳しい中で、先進的な知識を得、また、ネットワーク強化する貴重な機会となっている。

7 年目にあたる本年度は、大学農学部講師、保健省医薬品・食品品質管理研究所分析官（ともに大学卒）を招聘し、森義仁教授および由良敬教授の下で専門知識とその技術利用に関する短期研修を行った。

### （2）研修期間

平成 31 年 1 月 20 日～2 月 2 日まで（日本滞在は 1 月 21 日～2 月 1 日まで）

### （3）研修内容

- ・ 化学と生物学の技術利用の多様性（Diversity for Biology and Chemistry）に関する指導
- ・ 農業技術における東大政策ビジョン研センター（AI・ビッグデータ利用）、企業、薬局等、化学と生物学の技術利用の現場訪問
- ・ アフガニスタン人医師が運営するクリニック・老人介護施設訪問
- ・ アフガニスタン女性研修生を囲む懇談会（教員、学生、留学生、アフガニスタン関係者が参加）

### （4）成果

2 週間、研修生は、化学と生物学の技術利用の多様性に関する講義・実験、また、それらを実際に活用する現場訪問からなる研修を受けた。これらを通じて、専門知識の向上に加えて、化学や生物学が実社会においてどのように活用されているのかを学ぶことができた。訪問先の選定は、研修員の関心を踏まえてなされており、研修員の評価も高かった。今後のアフガニスタンでの知識・技術の活用も見据えた発言も見られた。

また、最終日に開催された評価会・閉講式には、駐日アフガニスタン大使館からの参加を得、本学の長期的な取り組みの成果を関係者に知っていただくことができた。

研修生からは、大変有意義な研修であったとの謝意が示され、アフガン女性の為に今後も本研修を継続して欲しい、研修期間を長くして欲しいといった声が聞かれた。また今後、本学修士課程での研究を希望する研修生もあり、留学制度に関する情報収集を行った。



↑学長表敬（1月23日）

↑森教授の実験（1月24日）

↑由良教授の講義（1月30日）

↑政策ビジョン研究センター（1月30日）

↑レシャード医師が運営する老人介護  
施設（1月31日）

↑評価会・閉講式（2月1日）

## 2. アフガニスタン国未来への架け橋・中核人材プロジェクト（国際協力機構（JICA）PEACE プロジェクト）

国際協力機構（JICA）は、アフガニスタンの持続的開発を支える中核人材の育成を目標として、2011 年から 2019 年の間、同国の行政官及び大学教員を日本国内の大学院修士課程等へ受け入れる「未来への架け橋・中核人材プロジェクト（PEACE）」を実施している。

### 2 人目の PEACE プロジェクト研修員として

大学院博士前期課程理学専攻に進学した。研究テーマの「BRC1 遺伝子に見られる変異と疾患の関係」等に関する研究を進めたが、その際、JICA 支援による特別プログラム<sup>(注)</sup>によるチューターと補助教材を活用しデータ解析手法を学び実践した。

帰国後は大学等での後進の育成・指導に当たる予定。特別プログラムの活動により、アフガニスタンの高等教育機関において次世代の人材を育てる指導者及び研究者としての必要な知識と技術を習得した。

PEACE プロジェクト全体では、来日した研修員のうち女性研修員は当初は 5%であった。アフガニスタン国の復興に向けたこれら女性の今後の活躍が期待される。

（注）既存の大学の授業や研究室での指導に加えて特定の目的達成や開発ニーズを踏まえた特別の活動を行うことにより更なる効果の向上を目指して実施される付加的プログラム。グローバル協力センターでは、JICA との業務委託契約に係る事務処理を行いサポートした。

## 3. アフガニスタンへの絵本寄贈（野々山基金）

アフガニスタンをはじめとする開発途上国における女子教育支援に関する事業への支援を行うことを目的として平成 23 年度に設置された「アフガニスタン・開発途上国女子教育支援事業野々山基金」の活動として、同国で絵本・図書館事業を展開する公益社団法人・シャンティ国際ボランティア会と協力し、平成 24（2012）年度から絵本の作成・印刷・配布を実施している。

平成 30（2018）年度は、アフガニスタンの子どもにとり必要な知識である食物、栄養、健康に関する絵本「ハミダと栄養三兄妹」の作成を行った。同絵本は、お茶の水女子大学の保健教育教材「Foods & Nutrition」※を活用し、現地編集委員会の議論を経て作成された。

「ハミダと栄養三兄妹」は、タンパク質、炭水化物、ビタミン等について、それぞれの栄養素に扮した妖精がアフガニスタンの食べ物に含まれる栄養について説明するお話。これま

でアフガニスタンでは、子ども向けの栄養の本がなかったこと、また、子どもの理解を考慮し、やさしい内容となっている。ダリ語とパシュトゥ語、各 1,200 冊、合計 2,400 冊を印刷し、カブール州とナンガハル州の図書館・学校図書館に配布する予定である。

※室伏きみ子学長、滝澤公子特別研究員ほか執筆の健康教育絵本「Foods and Nutrition」

#### 4. 乳幼児ケアと就学前教育（国際協力機構（JICA）課題別研修）

独立行政法人国際協力機構（JICA）の委託を受け、ベナン、ブルキナファソ、カメルーン、ガボン、ヨルダン、マラウイ、パレスチナから 8 名の研修員を受け入れ、2018 年 9 月 25 日から 10 月 19 日まで幼児教育に関する研修を実施した。8 名の研修員は各国の幼児支援分野において行政官や視学官、指導主事として、指導的な立場にある。本研修は、昨年度まで実施してきた「JICA 中西部アフリカ幼児教育研修」の後継事業として、今年度より開始した。

サハラ以南アフリカにおいては、5 歳未満児の死亡率や栄養失調・疾病罹患率が非常に高く、早急に解決すべき問題となっている。国際社会においても、近年、乳幼児期からの保護と教育を一体化させた総合的アプローチの重要性が認識され、幼児教育分野での途上国に対する支援体制が強化されてきたが、サハラ以南アフリカでは、乳幼児の保護や教育に関する専門的人材は不足している。

本研修ではアフリカ・中東地域の人材育成に資するべく、日本の幼児教育や保育、幼児に対する支援について、その制度・政策、保育内容・保育方法、人材育成、評価などに関して、講義や視察、ワークショップを実施し、これらを通じて幼児支援に関する研修員の知識や技能を向上させることを目標にした。研修後のアンケートでは、研修で掲げた 6 つの単元目標（①所属組織での問題点の発券・整理、②ECD[Early Childhood Development]の概念・内容・動向、③幼児教育における格差問題とその是正案、④子どもの発達に応じた適切な保育内容・保育方法・教材作成、⑤教員養成・研修のシステム、⑥幼児教育における評価）についていずれも高い達成度が示された。研修最終日には、各研修員から帰国後の行動計画（アクションプラン）が発表された。この行動計画に基づき、日本での研修の成果を自国で活用していく予定である。

【日程】

日付(曜日)	時間	内容	場所	講師
9月25日 (火曜日)	13:30- 14:00	開講式	お茶の水女子大学文 教育学部第一会議室	
	14:00- 14:30	プログラムオリエンテーション	お茶の水女子大学文 教育学部第一会議室	浜野隆(お茶の水 女子大学)
	14:30- 16:00	日本の幼児教育概要(講義)	お茶の水女子大学文 教育学部第一会議室	浜野隆(お茶の水 女子大学)
9月26日 (水曜日)	8:50- 11:30	日本の幼児教育(視察)	東京学芸大学附属幼 稚園	君塚仁彦・山田有 希子(東京学芸大 学附属幼稚園)
	午後	インセプションレポート発表準備		
9月27日 (木曜日)	9:00- 17:00	インセプションレポート発表	お茶の水女子大学文 教育学部第一会議室	浜野隆(お茶の水 女子大学)
9月28日 (金曜日)	13:30- 17:00	ECD の理念と国際動向(講義)	JICA 東京 410	三輪千明(広島大 学)
9月29日 (土曜日)		休日		
9月30日 (日曜日)		浜松へ移動		
10月1日 (月曜日)	9:30- 10:00	聖隷クリストファー大学訪問(挨拶)	聖隷クリストファー大学 2502	大城昌平(聖隷ク リストファー大学)
	10:00- 11:00	学内施設見学(視察)	聖隷クリストファー大学 2502	
	11:00- 12:30	講義「母子保健」	聖隷クリストファー大学 2502	市江和子(聖隷ク リストファー大学)
	13:30- 15:30	子どもたちの主体的な学び:アフリカの文化や環境を利用して実践できる方法	聖隷クリストファー大学 2502	太田雅子(聖隷ク リストファー大学)
10月2日 (火曜日)	10:25- 11:45	教職実践演習	聖隷クリストファー大学 2202	太田雅子(聖隷ク リストファー大学)
	12:00- 13:00	全学学生交流	聖隷クリストファー大学 1409	
	14:00- 16:30	演習科目「音楽」	聖隷クリストファー大学 音楽室	二宮貴之(聖隷ク リストファー大学)

10月3日 (水曜日)	9:30- 11:00	保育園見学(障害児保育の見学を含む)	ながかみ保育園	野村弘子(ながかみ保育園)
	11:45- 12:15	無認可保育園見学(認証保育園の実際)	家庭保育園マミー	鈴木美千代(家庭保育園マミー)
	14:00- 16:30	演習科目「美術」	聖隷クリストファー大学 2401	鈴木光男(聖隷クリストファー大学)
10月4日 (木曜日)	8:10- 11:30	こども園見学(子ども中心保育の実際)	聖隷クリストファーこども園	太田雅子(聖隷クリストファー大学)
10月5日 (金曜日)	13:30- 16:00	幼児教育における評価:子どものQOL(講義)	JICA 東京 410	松本聡子(お茶の水女子大学)
10月6日 (土曜日)		休日		
10月7日 (日曜日)		休日		
10月8日 (月曜日)	10:00- 10:30	ようこそ東京おもちゃ美術館へ	東京おもちゃ美術館	馬場清(東京おもちゃ美術館)
	10:40- 11:50	木育と年齢別おもちゃ	東京おもちゃ美術館	鈴木里枝(東京おもちゃ美術館)
	13:05- 15:05	わらべうたワークショップ	東京おもちゃ美術館	田村洋子(日本わらべうた協会)
	15:10~ 15:40	質疑応答	東京おもちゃ美術館	田向優(東京おもちゃ美術館)
10月9日 (火曜日)	10:00- 10:55	東京おもちゃ美術館見学(館内ツアー)	東京おもちゃ美術館	田向優(東京おもちゃ美術館)
	11:00- 12:00	おもちゃと遊びのワークショップ	東京おもちゃ美術館	岡田哲也(東京おもちゃ美術館)
	13:05- 14:05	手作りおもちゃワークショップ(身近な素材を使って)	東京おもちゃ美術館	佐野佐和子・宮野裕美(東京おもちゃ美術館)
	14:15- 15:15	アナログ・ゲーム体験	東京おもちゃ美術館	雨宮七緒子(東京おもちゃ美術館)
	15:20~ 15:50	質疑応答	東京おもちゃ美術館	田向優(東京おもちゃ美術館)
10月10日 (水曜日)	10:00- 12:00	日本の幼児教育の理念と方法(視察)	お茶の水女子大学附属幼稚園	森義仁・上坂元絵里(お茶の水女子大学附属幼稚園)

	13:00- 15:30	幼稚園運営の実際	お茶の水女子大学附 属幼稚園	森義仁・上坂元絵 里(お茶の水女子 大学附属幼稚園)
10 月 11 日 (木曜日)	10:00- 12:00	幼児教育と初等教育の連携(視 察)	お茶の水女子大学附 属小学校	池田全之・神戸佳 子(お茶の水女子 大学附属小学校)
	13:30- 16:30	子ども中心の保育・幼児教育	お茶の水女子大学、学 生センター棟、第五会 議室	内田伸子(十字学 園女子大学)
10 月 12 日 (金曜日)		資料整理	JICA 東京 405	
10 月 13 日 (土曜日)				
10 月 14 日 (日曜日)	10:00- 17:00	遊びを通して学ぶ(ワークショッ プ・講義)	JICA 東京 406	坪川紅美(幼児教 育ネットワーク)
10 月 15 日 (月曜日)	9:30- 12:30	保育内容と保育計画ー領域「環 境」を中心に	お茶の水女子大学文 教育学部第一会議室	松島のり子(お茶 の水女子大学)
	13:30- 16:30	論理的思考の芽生えー数概念形 成の幼児・児童の姿からー	お茶の水女子大学文 教育学部第一会議室	坪川紅美(幼児教 育ネットワーク)
10 月 16 日 (火曜日)	9:30- 11:30	「人・遊び・地球・家庭・地域」の 5 つの「つながり」を大切にした保 育(視察)	文京区立お茶の水女 子大学こども園	宮里暁美(文京区 立お茶の水女子 大学こども園)
		アクションプラン作成	JICA 東京 409	
10 月 17 日 (水曜日)	10:00- 12:00	日本の幼稚園と保育所(視察)	同仁美登里幼稚園	関本泰子(同仁美 登里幼稚園)
	14:00- 17:00	子どもの言葉を育む保育ーその 計画と実践(講義)	お茶の水女子大学文 教育学部第一会議室	小山祥子(駒沢女 子短期大学)
10 月 18 日 (木曜日)	9:00- 17:00	アクションプラン発表	お茶の水女子大学文 教育学部第一会議室	浜野隆(お茶の水 女子大学)
10 月 19 日 (金曜日)	14:30- 15:30	まとめ、テキスト共有、評価会	JICA 東京 408	浜野隆(お茶の水 女子大学)
	15:30- 16:00	閉講式	JICA 東京 407	



## V. その他





## 1. グローバル協力センター図書室利用状況

グローバル協力センター図書室は平成 23 年（2011）年から開室しており、国際協力、平和構築、開発に関する教育・研究、学習に必要な図書およびその他の資料を収集・管理し、お茶の水女子大学学部生、院生、附属高校生、卒業生および教職員の利用に供するよう務めた。2019 年 1 月末時点で 1604 冊蔵書している。開室時間は祝祭日、夏季・冬季一斉休業日を除く月曜日から金曜日の 10 時から 17 時で、今年度の年間開室日は 235 日である。貸出方法はセンターに利用登録をし、直接貸出、返却をする。今年度の利用登録者は学部生 68 人、大学院生 32 人、附属高校生 1 人、教職員 9 人であった。今年度も 200 冊を超える貸出と閲覧があり、平成 23 年（2011）年のセンター図書室開室より延べ 1496 冊の貸出を行った（2019 年 1 月 31 日時点；図 1）。

利用者は、附属図書館の蔵書検索 OPAC で資料を検索し来室している。主に文教育学部生の利用が多く、次いで大学院生の利用が多い。貸出が最も多い月は 6 月、11 月で、併せて 58 冊の貸出利用があった。6 月は学部 1、2 年生が主で、11 月は学部 3、4 年生、大学院生の利用が主であった。センター図書の貸出期間は学部生でも 4 週間（貸出予約がない場合は貸出延長可）あるため、利用しやすいとの声がある。貸出本については、台帳と Access で管理し、利用者にはメールにて返却のリマインドを行い本の回収に努めているが、2019 年 1 月末時点で 1 年以上の長期未返却の図서가 6 冊ある。今年度、新規に貸し出した図書については、長期未返却の利用者はいない。このことから、返却のリマインドが回収に役立っているということが分かる。



図 1 平成 23（2011）年度～平成 30（2018）年度（1 月末まで）貸出状況

## 2. 情報発信

### (1) ホームページによる情報発信

グローバル協力センターのホームページは、センターが主催・協力する各種イベント（公開講座、講演会、大学間連携イベント、履修説明会など）の学内外への通知・案内と活動報告を中心に年間約 40 件の情報を掲載している。各種イベントの報告は「共に生きる」スタディグループ・メンバーをはじめとするイベント参加学生が執筆した。

活動報告のうち 10 件は英訳し、うち 2 件は英語版ホームページに掲載し、対外（国内及び国外）的な情報発信に努めた。残り 8 件についても順次ホームページに掲載予定である。また、印刷・製本した報告書はすべて電子化（PDF 化）して、センターホームページの「刊行物」コーナーから閲覧できるようにした。

### (2) メーリングリストによる情報発信

平成 30（2018）年度の「共に生きる」メーリングリストへの登録者は約 150 人（2019 年 1 月現在）となり、年間約 60 件以上の学内外（国連、JICA、NGO 等）のイベント情報（国際シンポジウム、セミナー、インターン募集等）や「共に生きる」スタディグループの活動情報を発信し、学内外の公開講座やイベントへの関心を高めるきっかけを作った。

### (3) 大学メールマガジン、公式 SNS、学生ポータルサイトによる情報発信

上記以外の広報手段として、学内者に向けてイベント情報を発信する場合は大学メールマガジン（OchaMail）や学内電子掲示板（Digital Signage）、学生ポータルサイト、Twitter を利用し、一般向けに広く発信する場合は大学ホームページや Facebook を利用するなど、よりタイムリーに、より広範囲にセンターの活動や取り組みを情報発信することに努めた。

---

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
女性の役割を見据えた知の国際連携  
平成 30（2018）年度 実施報告書

2019 年 3 月  
お茶の水女子大学 グローバル協力センター発行

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1  
Tel&Fax : 03-5978-5546  
Email : [info-cwed@cc.ocha.ac.jp](mailto:info-cwed@cc.ocha.ac.jp)

---

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

**平成30(2018)年度 実施報告書**



お茶の水女子大学